

姫はつづけた。

「まあ、先生は……でも若し先生が私を愛してゐて下さるのなら、氣の毒だと思つて下さるわ」彼女等は是等の手紙に對して返事を認めた後、封印をしてこれをアポロニアスに托して、父王の手にとつけて貰つた。その返事にはかう書いてあつた。

「父上は私に私の思つてゐる事を書くやうにとのお話でありますから、私はそれを書いてみました。私はあの難破のうき目にお遇ひになつた御仁と結婚致さうと考へてをります」

王はこの返書を読んだ。しかし、この三名の中の誰れが難船のうき目に遇つたのか彼れには少しも分らなかつたから、この三名の競争者に「皆様の中の誰れが難船に遇つたのですか」と訊ねたのである。さうするとアルドニアスと呼べる貴族は進み出で、「それは私であります」と答へた。これを側で聞いてゐたところの第二の候補者はかう言ひ出した。

「何んですと。貴殿は狂人だ。貴殿はどうかしてゐるのだよ。貴殿が町の門から一步も出たことが無いのはこの私が善く承知してゐる。それが何所で難船したといふの？」

王は難船した求婚者を發見することが出来なかつたから、今度はアポロニアスの方に向いて言うた。

「貴殿からこの手紙を読んで貰ひませう。私が讀むよりも貴殿から讀んでもらつた方が善く分りませう」

アポロニアスは書面を取上げてざつと讀み通ほし後、これは自分自身のことを指差してゐるもので、結局姫は自分を戀してゐるのであると知つた。彼れは思はず顔を赤くした。王はこれを見てとつた。そして「難船の人物は分りましたか」と問ふのであつた。アポロニアスはいよく顔が赤くなるばかりであつた。彼れはたゞ簡單な答をなすのみであつた。アポロニアスの考へは十分こゝで分つた。かの「傳道書」の中にも「言葉多ければ知識全く無し」とある。亦「ピーター傳」第一篇の第二章にも「基督は爾に終生守るべき模範を残し給うた。そは基督自身が罪を犯し給ひしことも無く、況んや口に偽りを出し給ひしこともなければなり」とある。同様のことが讚美歌作者デヴィッドの御言葉の中にもある。例へば「彼れ宣ひしが如く、その如く皆行はれたりき」とある。故に彼れは眞實なるイスライルの人と呼ばれ給うたのである。彼れには偽といふものが無つたのだ。同じく「ジョン傳」第一章に「故に我等は彼れを學んで他人の惡口を言ふことを避けざるべからず、惡口に報いるに惡口を以てすべきもので無い。呪詛に報いるに祝福を以てすべきものなり。かくの如くにしてこれは迅速な



る筆者……忽にして書き下すところの聖靈のペンとなるべし」とある。故に所謂「忽にして天に響きがとどく」といふことがあるのである。同様に「ピーター傳」第二篇、第一章に「幸福の日を見んと欲する者は悪事を言ふ可らず、偽を語る唇は不幸を生む」とある。即ち人間は悪事を人知れず獨語することも、或はこれを外部に行ふことも避けなくてはならぬものである。若しこのやうな事を謹慎してゐるならば、生涯平和に暮らし得るのみではなく、來世に於ても永劫の平安を享けることが出来るのである。何故と言へば、かくの如くにしてこそ初めて隣人を害する毒舌を防ぎ得るからである。そしてこれが體て永久の平和の源ともなるのである。故にデヴィッドは「我は平和に眠り且つ平和に休む」と宣うた。蓋し善にして且平和な人の言葉は神の御力に依りて發するものである。それと同様に悪人の言葉は悪魔に依りて支配されてゐる。是所に於て「我等の庭園に一本の白き茨生成し、小鳥其の上に住む」といふことになる。この庭園こそは我等の口を最もよく説明してゐる。何故といへば人間の口は二重の垣根、即ち齒と唇といふもので護つてあるからである。そしてかういふ風に二重の護衛を持つてゐるといふ意味は、要するに神を讚美する以外に物言ふことを避けしめようとする天の配劑に外ならぬのである。庭園の中の茨とは舌即ち言葉のことである。茨と舌とは善くその形が似てゐる。實際の茨も、舌の茨も人間を刺すことには異りは無い。舌は或る人の場合に於ては、その人の善い感じを取去つて仕舞ひ、又或る人の場合に於ては虚偽に依りて、或は又他人の悪事をあばくことに依りて、人の感情を害するものである。是等は何れも注意して避くべきものである。茨に宿る小鳥は悪魔である。この悪魔は人間を惡に導いてその奴隸となす。故に是等の悪魔は最後の裁判の日に「公平なる裁判者よ、この人は我等の者でありますから、是方へ投げて下さい。この人は有徳の士ではありませんから、爾の者となることを欲してをりません。この人は悪徳の人間でありますから、我等悪魔の物であります」と叫ぶ。故に我々はお互に言葉を慎しまなくてはならぬ。ケートーは言葉を慎しむは徳の第一義であると言つた。

閑話休題、さて國王は姫の考へのあることが明かになつたので、前記の三人の求婚者に「何れ適當の時が來たならば諸君に御通知致しませう」と言つてそれ／＼の本國へ還らしめた。王はそれより直に王女の部屋に入つて訊ねて言うには、

「お前は誰を夫として迎へやうと言ふのか」

彼女は彼れの前に平伏して涙ながらに答へた。

「父上よ、私は難破の憂目にお會ひになつたといふアポローニアス殿を夫と致し度いのであります」



父親は姫の涙に動かされた。彼れは彼女を扶け起して言った。

「あの人がお前の望んだ男である以上は、それは亦私の望みにもかなふといふもの。一日も迅く結婚の日取を致さう」

翌朝王は近くの町々へ使者を遣して貴族の人々を招待した。彼等が翌朝王の前に現はれた。王は彼等に言った。

「皆様に申上げ度いのは私の娘をこの度その先生と結婚させることに決定致しました。娘も漸く賢人と結婚することになつたのでありますから、何卒皆様も悦んで下さい」

さう言つた後彼れは結婚の日取を定めた。

彼等兩人は結婚した。程なく姫は妊娠した。或日姫はその身重の體をもつて夫と共に海岸を散歩してゐると、沖の方に美しい船が錨を投げてゐるのを見た。アポロニアスはその船が彼れの本國の船であることを知つた。そこで彼れは彼れの側にゐた一人の水夫に「お前は何所の者か」と訊ねた。水夫は「私はタイアの者です」と答へた。

「お前は私の本國のことを言つてゐる」

「では貴殿はタイアのお生れで？」

「さうだよ」

水夫はなほつゞけて言った。

「貴殿はその國の王者アポロニアスと申す御仁を御承知ですか。私はそのお仁を搜索してゐるのです。若し貴殿が何かの機會でそのアポロニアス殿にお會ひのことでもありますならば、何卒嬉しい便りをお聽かせ申して下さい。それは別事ではありませんが、アンティオーカス王とその姫が同時に電光に打たれて死亡したので、その領地は皆アポロニアス陛下の御所有となつたことでもあります」

アポロニアスはこのやうな全く思ひも寄らぬ報知を得たので、非常に嬉しく思つて、妻に「私はこれからその王位を受ける爲に直ぐ本國へ還らうと思ふがお前はどうか」と訊ねた。王妃はこれを聽くや否や兩眼に涙をた、へて言った。



「貴郎はその永い旅路にお上りになるのですか。私をこゝに残して……若しどうしても貴郎が本國にお還りにならうと言ふのなら、私も御一緒に参ります」

彼女は直ぐ彼女の父親に會つて今聞いたばかりのその幸福な報知を語つた。そしてこのやうにアン・テオーカスとその女が天罰を受けて雷光に打たれて即死し、その國の富と王冠が夫の爲に保留してあるのだから、私達夫婦は一日も早く其所へ参つて王者の位を受取つて参りますと話したのである。老王は非常に悦んで直ぐその出立の請ひを許したのみならず、出帆の準備をすら人々に傳へたのである。彼等は美しい船を用意して航海中に必要な品物を何くれとなく之に積み乗せた。ライゴリディスといふ乳母も航海中の出産を豫期して同行することになった。父王は彼等を海岸迄見送つて別を惜しんだ。

一行の者が海上に出てから數日目にして大きな暴風に遭遇した。王妃はこの事柄の爲に未だ出産の時では無いのに俄に激しい陣痛を起して、誰れの目にも明かに死んだものと思はれぬほどの憐れな有様を見せてゐた。人々の悲しみ嘆く聲は殆んど暴風雨にも劣らぬものがあつた。アポローニウスはこの叫びを耳にして大に愕いて彼れの妻の部屋に駈けて行つた。彼女は死人そのまゝの顔をして横

つてゐた。彼れは狂氣の如く我れと我が衣を引裂いた。そして彼女の死骸の上に我が體を投げて泣き悲しんだ。彼れは叫んだ。

「嗚呼私の可愛き妻よ、大アルティストラテスの娘よ、私はお前の不運な父上を何とて慰めることが出来ようか」

この時水先案内者がアポローニウスを遮つて言つた。

「失禮ではございますが、死人を船に置くことは不吉でありますから、一時も迅くその御遺骸を海中に投げて下さい」

アポローニウスは怒つて叫んだ。

「何を無禮なことを申すか。これを海中に投げろと言ふのか。つまりぬことを言うてはならぬぞ。この女は難破した時に私を救つてくれ、その上、私の貧苦を助けてくれた恩人なのだ」

しかし、航海中の習慣として死骸を船中に置くことは許されなかつたから、彼れは終にこれを水葬



することに決心した。そこで先づ従者に命じて死骸を入れる爲の棺を造くらせ、その蓋に瀝青を塗らせた。彼れは亦その死骸と共に鉛で造つた巻物を入れた。それから王妃の着る禮服を着せ、冠を戴かせてその遺骸を棺の中に横へた。彼れは彼女の冷たい唇に接吻して大に泣いた。その後彼れは生れた許りの赤兒の手當を嚴重に従者に命じ置き、彼れの妻の體についてゐる物は悉くこれを海中に棄てた。

三日目に棺が波に運ばれてエフェサスの海岸に漂着した。其所から遠からざる場所にセリモンと呼ぶ名醫が住んでゐた。セリモンは恰度その棺の漂着した時、彼れの弟子と一緒に海岸を歩いてゐた。彼れは浪に棄てられたこの棺を見るや否や、従者に命じて直ぐそれを拾ひ上げて彼れの家に運ばせた。

家に戻つてその蓋を開けてみると中から綺麗な乙女が出た。然かも皇族の衣を着けた婦人が出たのであつた。餘りに美しい女であつたので皆の者は驚いて仕舞つた。彼女は恰もかの一切の清淨にして完全なる物を造つたところの日光そのもの、如く美しくあつた。彼女の容貌には不滅の性質以外の如何なる物も宿つてをらなかつた。彼女の頭髮は雪の如くかゝやいた。そしてその頭髮の下方には牛乳のやうに白い額が、恰度平野の如く滑かに且つ坦々として平和の夢を結んでゐた。彼女の眼は二つの光球體が常に千變萬化して、然かもその光を不醇のものとなさぬのと同様であつた。何故と言へば、その目の光りは常に一定不易の節操の觀念を宿してゐたからである。亦彼女の双の眉も實に自然的

に且つ高尚にその場所を得てゐた。又その高い鼻は眞直ぐに顔の中央に形よく持ちあがつてゐた。長すぎもせず、短すぎもしない、頗る均合ひを得た上品の鼻であつた。頸は北極の光よりも白かつた。そして、その頸の周圍は寶石で一面に飾られてあつた。彼女の顔は無限の歡喜を宿してゐた。故にこれを見た者は皆何とはなしに、幸福を感じたのである。彼女の形は頗る善く釣合がとれてゐた。故に如何なる惡口家でもこの姿に對しては非難すべき點を見出すことが出来なかつたのである。例へば彼女の美しい腕は、恰度或る美しい木の枝のやうに、その誂へ向きの胸の部分から左右に垂れてゐた。そして、鑿で巧妙に切つて作つたやうな指がその腕にくつついてゐた。然かもそれが電火の光りにその美をけ落されるといふものが無かつた。要之、彼女はその外形から見て明かに一つの完全な模型であつた。彼女の造物主の液體の皮部に植付けられたその神聖な靈の閃光が、この綺麗な肉體の模範を通じて美しく見られるのであつた。各部分が調和しなければ有力な物は出来あがるものではない。魂の美は肉體の一切の美を生ずる源である。故に精神に於て秀でたところがあれば、如何にそれが異つてゐるものであるにしても、物質の結合したものを、精神そのものに順應せしめたるものであるとさへ言はれてゐる。

いづれにもせよ、ともかくセリモンは魂と肉との最も完全に一致結合してゐる實例を、この婦人に



於て見出したのである。彼れは言つた。

「美しき乙女よ、御身はどうしてこのやうに棄てられたのであるか」

彼女の死骸の枕の下に置いてあつた金がふと彼れの注意をひいた。同時に鉛の巻物も現れて來た。

「この巻物に何が書いてあるのだらう、一つ讀んでみようでは無いか」

さう言つて彼れは巻物を開けてみた。次のやうに書いてあつた。

「この箱を見出す者はその何人たるを問はず、何卒黄金百枚を私から受けて下さい。又他の十枚はこれを葬禮の費用に充て、下さい。この婦人の肉親の者は皆この女の死を悲しんでをります。若しこの棺を見出した者が私の願ひを行つてくれぬならば、私は必ず最後の裁判の日にその人を呪詛し、且つ畜生道に落してやるつもりです」

お醫者のセリモンはこれを読み終つた後、彼れの従者等に命じて喪主の希望の如く取扱はしめた。彼れはその時つけ加へて言つた。

「この氣の毒な人が言つてゐる以上にもつとお金をかけて立派にお葬ひをしてやるんだぞ」

彼れは直ぐ火葬の準備をさせた。萬端の用意が出来た頃弟子の一人が是所へやつて來た。この弟子は年齢は若いが知識は老人にもまさつてゐた。彼れは今にも火葬されようとしてゐる婦人の、その綺麗な姿を見て深く考へこんでゐるやうであつた。そこで僧侶は彼れにかう言ひ出した。

「貴殿は丁度善い時にお出で下さいました。實は貴殿のお出で下さるのをたつた今迄心待に致してゐたところであります。さあ、香油の瓶を受取つてこの綺麗な亡者の爲に、葬火に注いで下さい」

彼れは快諾した。彼れは死骸に近寄つて、その胸のあたりから衣を少し引離して香油を其所へ振りかけた。しかし、彼れが偶然にその死骸の心臓の上に手を觸れた時、鼓動がなほかすかに残つてゐるのを感じたやうな氣がした。若者は電氣に打たれたやうであつた。彼れは脈搏をとつてみた。亦その鼻の孔に手をあて、見て呼吸がなほ残つてゐるのではあるまいかと驗べてみた。彼れは彼れの唇を彼女の唇に觸れてみた。彼れは生と死とがなほ争つてゐることを感じた。彼れは急いで従者を呼び寄せて棺の隅に松明を置かせた。松明がかん／＼燃えてゐる間に、今迄凝結してゐた血が俄に溶けて來



た。この變化を見てゐた若者はその師匠に大きな聲で呼びかけた：「生きてをります生きてをります、先生は私の言ふことを未だ疑つてゐられますが、まあこゝへ來て御覽下さい」

彼れはこのやうなことを言つた後、彼女を彼れ自身の部屋に運んだ。それから後、彼れは己が胸の上に香油を載せて熱した後、羊毛の一片をその香油に漬けて、それを彼女の體の上に置いた。是等の方法を熱心に試みた結果、固まつてゐた血が次第に溶けて來て、精氣が再び髓の奥迄行き互るやうになつて來た。血管も通じて來た。眼も開らいて來た。呼吸も還つて來た。

彼女は言つた。

「貴殿は誰れ？ 私の體にお觸れになつてはいけません。私は或る國王の娘であります。そして亦王妃であります」

若者は初めて彼女の聲を聞いたので悦びにたへなくなつて來た。彼れは師匠の部屋に駆けこんでこの事を語つた。師匠は言つた。

「私はお前の技倆を認めた。實に感心したぞ。特にお前の用意周到なのは感心だ。學問の難有味を思つて、決してこれを輕んじてくれるなよ。お前に今その褒美を與へるから受けてくれ。實はこの

婦人は澤山のお金を持つて來てゐるのだよ」

セリモンは彼女に食物や衣服を送つてやつた。特に高價な強壯劑を惠んだのである。彼女はその後數日を経てから彼女の家族や、これ迄受けて來た不幸の事等を打明けた。親切な老醫師は彼女の境遇に同情して彼女を我が養女とした。しかし、彼女がダイアナ神の童貞女としてその殿堂に移り住むことの許しを彼れに求めた時に、彼れの悲しみは實に大なるものがあつた。だが、彼れはその希望を拒絶しなかつた。そして彼女の爲にいろいろの便宜を計つてやつて、その女神の大きな殿堂に婦人の從者と共に彼女を置くこと、した。

かゝる事の起つてゐた間に、アポローニウスは神の善意に依りてタルサスに到着することが出來た。彼れは其所から船を去つてストラングリヨとダイオニシアスの家を探した。互に相會してその出來事を語り合つた。アポローニウスは次の如く語るのであつた。

「私は可愛い妻に死別して憐れな者となつて仕舞つたが、それにしても未だこの赤兒が生存してゐたから悦んでゐる。何卒この女兒を預つて貰ひ度い。私はアルティストラテス老人を再び訪づれぬ決心だ：：老人の娘がもう死亡したのだから：：しかし、私のこの女兒をお前さんの娘のフィロ



マティアと一緒に教育して貰ひ度い。そして彼女にお前さんの町の名をとつてタルシアといふ名をつけて貰ひ度い。又、もう一つお頼みすることがある。それは外でもないが彼女の乳母のライゴリデイスの行末のことである。この女は善く忠義をつくしてくれたのだから、もつと報いてやらなくてはならぬのだ。萬事よろしく面倒を見て貰ひ度い」

かう言うてアポロニアスは幼児を彼等に渡した。そしてこれと共に金銀や貴重品の物を澤山彼等に與へた。彼れはこの時誓ひをたゞて言うには、私はこの女兒が成人して結婚する迄は、私の髭も、頭髮も、爪も切らぬと、かう斷言したのである。ストランギリヨはこの亂暴な誓ひを悲しみながらもともかくその赤兒を受取ることにした。そして最善の力をつくして養育致しませうと約束した。アポロニアスはこの保證を得て大に満足して直に彼れの船に乗つて、飄然として他の國へと乗出した。かゝる間にタルシアは五歳に達した。そして彼女の友なるフィロマティアと共に一般の教育を受けた。彼女が十四歳の時であつたが學校から歸宅してみると、乳母のライゴリデイスは急に病氣にかゝつてゐた。タルシアはその側に寄り添うて言葉靜にどうしたのですかと問うた。さうすると乳母は次のやうなことを語り初めた。

「私の可愛い娘よ。私の言ふことを注意して聞くんだよ。そしてそれを胸の奥に藏めて決して忘れぬやうにするんですよ。お前さんは誰れをお前さんの父親や母親だと思つてをりますか。又その生國を知つてをりますの？」

タルシアは答へた。

「それは分つてゐるではありませんか。私の生國はタルサス、私の父はストランギリヨ、私の母はダイオニシアスであります」

乳母は嘆息して言うた。

「私の娘よ、お聞きよ、今お前さんの御兩親のことを語つて聞かせますから……私が死んだら將來何かにつけてその事がお役にたつと思ふから……實はお前さんの父親といふのはアポロニアス、母親はアティストラテス王の女ルーシナと申される御仁ですよ。お前さんを生むと直ぐルーシナ様は死去おかくれになりました。アポロニアス様はその御死骸に王妃の衣をお着せになつて、それを棺に入れて海中にお投げになつたのですよ。それから黄金二十枚をその枕の下にお入れになつて、それを



見出した者に葬式のことを御依頼になりました。ところでお前さんの父親のお乗りになてゐた船は、彼方は方と暴風に弄ばれた末は所へ漂着したのですよ。ストラングリヨとダイオニシアスは親切にも私等一行を是所で救つてくれました。それでお前さんの父親は、お前さんと一緒にこの私をもこの家の夫婦にお預けになつたんですよ。その時お前さんのお父さんはお前さんが成長して結婚する迄は髭も髪も爪も切らぬと誓ひをたてられました。さういつた譯なのだから、私はお前さんに善く注意して置きますが、若し私が死んだ後で、お前さんの現在のお友達みかたがお前さんを害さうとしたならば直ぐ政廳通りへ逃げて行つて、其所に建て、あるお前さんのお父様の像に縋りついて、私が貴殿の娘でありますから、何卒救つて下さいと訴へるのですよ、さうすれば町の人々ももともと、お父様の恩を受けてゐたのだから、昔のことを思ひ出して必ずその大恩に報いる爲に、お前さんに代つて悪人等に仇を報いてくれますよ」

タルシアは言つた。

「私のなつかしい乳母よ。私は今迄全く知らなかつた事柄を聞かされて驚いて仕舞つたのよ」

「ライゴリデイスはなほ二三の事柄を物語つた後終に死亡して仕舞つた。彼女はその葬式に列し、且つ一箇年間喪に服した。」

その後タルシアは再び學校に通つた。しかし、彼女の習慣として學校から戻つて來ると直ぐ乳母の石碑の前に禮拜し、それが終つてから食事をすることにしてゐた。又彼女は酒瓶を手に下けて彼女の兩親の名を呼びながら、その碑のあたりをうろくしてゐることも多かつた。偶々ダイオニシアスはその娘のフィロマティアと共に政廳通りを通過した。タルシアはそれにも心づかずして一生懸命に父親の名を呼んでゐた。この時市民はタルシアの姿をちらりと見たので、大きな聲で叫んでいふには、

「美しいタルシアを子に持つた父親は果報者だが、タルシアのお伴侶れときは父親の面目をつぶすやうな御面相さ」

母親はこのやうに他人の女がほめられて我が生みの女が悪口されてゐるのを見て、狂人の如く憤つてその道を他の方へ轉じた。彼女は他人の居らぬ所へたゞ一人退いて獨語した。

「あのタルシアの父親は十四年間、その生みの女のことを忘れてゐる。手紙一本送るでもない。必ず今頃は死亡してゐるに相違ない。乳母も死んで仕舞つた。今は私が何事をやらうと邪魔だてをす



る者は無い譯だ。だからこの機會に私は彼女を殺害して、その飾りの品物で私の娘を美しくしてやらう」

彼女がそのやうな事を考へてゐた時、執事のセオフィラスと呼ぶ男が入つて來た。彼女は彼れを呼び入れて澤山の報酬を約した後、タルシアを殺害させることに話を進めた。セオフィラスは問うた。

「では彼女は何か悪事を致しましたのですね」

ダイオニシアスは答へた。

「それはそれは大變な悪事を犯したのよ。だからお前は私の言葉を拒むことは出来ませんぞ。私から言はれた通りの事を行へばい、のだ。若しお前がそれを行はぬならば、お前自身はとんだ災難になりますぞ」

「では、どういふ風にして致しませうか」

ダイオニシアスは答へた。

「彼女は學校から戻つて來ると、乳母の靈前に參拜することにしてゐて、それが終らぬ間は決して食事をとらぬこと、なつてをります。だからお前はその靈前に行く時を見計つて、彼女の頭髪をつかんで短刀で刺し殺すのですよ。そしていよく殺して仕舞つたら死骸を海中に投げて私の許へ來るんです。私は澤山のお金を與へてお前に自由を與へます」

執事は武器を携へて、大に悲しみの心を抱きながらその墓所へと歩いた。彼れは言つた：「嗚呼、私は處女の生命を犠牲にして、それで私の自由を與へられることが出来るだらうか」

彼れはタルシアが學校の仕事が終つた後、例の如く引籠るところの前記の墓所へ入りこんだ。タルシアの手には例の酒瓶があつた。執事は氣の毒なその少女を襲つた。彼れは先づ彼女の頭髪を掴んで彼女を地上に倒した。彼れは今や短刀を彼女に突き立てんとした時、彼女は叫んだ。

「お、セオフィラスよ、私はお前さんに、或はお前さん以外の他の御仁に對して、殺されなければならぬやうな罪を犯した覚えはないと思ひますが」

彼れは答へた。

「お前さんが父親から貰つてゐる金銀や皇室用の裝飾品を欲しいといふ以外に何の理由もないのさ」



棄てられた孤兒は叫んだ。

「どうしても殺されることになつてゐるのなら、死ぬ前に神様にお祈りをさせて下さい」

執事は答へた。

「それなら許してやるからお祈りでも何でもするんだよ。私がお前さんを殺すのは他から強いられるのと同じだよ」

こんな譯で少女が一心不乱になつてお祈りをさへてゐると、俄に海賊が是所へ亂入して来て分捕物を搜索し初めた。彼等は若い女が平伏してゐる側に一人の男が今にもあはれその女を殺さうとしてゐるのを見たので、「こら止めぬか、馬鹿者めが、それは俺等の分捕者なんだ、貴様にくれてたまるものか」と大喝した。セオフィラスは恐れて墓所から脱兎の如く逃げ出した。そして海岸に體を隠した。

海賊は彼女を海上に運び去つた。執事は夫人の許へ還つて御命令通りに姫を殺害して來ましたと報告した。そして彼女に次の如く忠言した。

「貴女は早速喪服をお着けになるがよからうと存じます、私も喪服を着けて彼女の死を悲しんでゐるやうに装ふことに致しませう。さう致せば市民は欺かれます。そして私達は彼等に對つて姫は病氣にかゝつて死亡したと申しませうよ」

ストラングリヨはこの事件を聴くや心から悲しんだ。彼れは叫んだ。

「この怖い事件には私も責任があるのだから大に悲しみを現はさなくてはならぬ。嗚呼私は何を爲すことが出来るだらうか。彼れは我々の手段の爲に難破の厄に遇つた。彼れは彼れの財産を失つて貧乏の極端なところ迄落ちたのだ。然るに我々は彼れの善に報ゆるに惡を以てしてゐる。彼れは彼れの女を我々に委ねた。然るに癡猛な牝獅子は彼女を食つて仕舞つた。私は何といふ盲目であつたらう。氣の毒なことをしたものだ。私は極惡劣等な毒蛇に覆へされたのだ」

彼れは彼れの兩眼を天に上げてつゞけて言つた。

「お、神様よ、私はこの乙女を殺したことに對して責任が無いことを御存知でありませう。この乙女を殺害したのはダイオニシアスであります」

それから彼れは彼れの妻の上に怒つた目を投げて言つた。



「汝は神様の敵で、又人間の名譽を汚した毒婦である。汝は王様のお姫様を殺害したのだ」

ダイオニシアスは外面だけは非常に悲しんでゐる風をよそほうた。彼女は彼女の家庭を喪に服させた。そして市民の前では甚しく泣き悲しんだのである。彼女は言うた。

「皆様何卒お聞き下さい。私達の悦びの的となつてゐた可愛いタルシアはもうなくなりました。死亡して仕舞ひました。彼女の爲に建て、やりました墓石は私達の涙で濡れることでありませう。

市民は眞鍮で新らたに造くられたところの彼女の記念像の下に參詣した。それは彼等が彼女の父から受けた大恩に對する感謝の念からであつた。

海賊團はタルシアをマチレンタへ運んだ。彼女はこのマチレンタと言ふ所で、他の奴隸等と一緒に賣物に出された。悪漢にして且つ放蕩者にして名高いレノーは、彼女の美人であることを傳聞して是非とも買取らうと苦心した。しかし、その町の王者アタナゴラスは、彼女の高尚優美にして且つ賢明であることを知つて黄金十枚を提供した。

レノーは言うた。「私は黄金二十枚を出す」

アタナゴラスは言うた。「では、私は三十枚出す」

レノーは言うた。「では、私は四十枚を」

アタナゴラスは言うた。「では、私は五十枚を」

レノーは言うた。「では、私は八十枚を」

アタナゴラスは言うた。「では、私は九十枚を」

レノーは言うた。「では、私は現金で百枚奮發しよう。しかし、もつと出さうと言ふ者があれば、私はそれ以外にもう十枚加へてもよろしい」

アタナゴラスは考へた。



「私はレノーにこれ以上競争する必要は無いと思ふ。彼れが出さうといふてゐるその同じ代金を拂へば、彼女と同じ位の女を一ダースも買ふこゝが出来るといふものだ。だから私はこの女を彼れに譲るこゝに致さう。そして彼女の家に密かに入りこみ、彼女の愛情を求めるこゝに致さう」

タルシアは終にレノーに買はるこゝになつた。そして彼女は直ぐレノーに導かれて、世間から悪評を受けてゐる或る家に入つた。この家の構内に寶石で造つた庭園の神プライエーバスが祭つてあつた。

レノーは言つた。

「さあ、女、この像を拜むんだよ」

「このやうな物を拜むこゝは出来ません。貴殿はラブサテニ派（註亞細亞の都市ラムプセーカスの住民なるべしとの説あり。この都市の住民はプライエーバス神を祭ると云）でありませんか」

「何故そのやうなこゝを言ふか」

「でも、ラブサテニ派の人々はプライエーバスを拜みますから」

「この毒婦めが、お前は有名な守銭奴レノーの家に来てゐるこゝを知らぬのか」

タルシアは彼れの足許に伏して叫んだ。

「何卒私を辱かしまないで下さい。何卒極悪非道な亂暴をして下さらぬやうにお願い致します」

レノーは答へた。

「お前は何といふ馬鹿者だ。レノーと申す男は他人を苦しめることに面白味をもつてゐる性質なのだから、いくらお前が祈つても泣いても、それは何の役にもたぬといふものさ」

彼れは婦人監督者（註、女の奴隷を監督してゐる者）を呼びに使者を送つた。そしてその監督者に請うてタルシアに美服を纏はせ、市中を引まはしながら彼女の買取値段を廣告して歩くやうにと依頼した。監督人はその依頼の如く行つた。三日目になると一團の人々はレノーを陣頭に立て、音楽を奏し



ながらやつて来た。しかし、アタナゴラスは假面を被つて最初に来た。タルシアは絶望的に彼れを見上げながら彼れの足許に彼女自身の體を投げた。そして彼れに對して次の如く嘆願するのであつた。

「何卒私を氣の毒な女だと思つてやつて下さい。この不名譽から私を救つて下さい。私の物語を一通りお聴き下さいませんか、私が何者の子であるかをお聴き下さいまして、私の清淨な心を守つて下さい」

彼女は彼女の運命の全部を具さに彼れに物語つた。アタナゴラスは如何にも當惑もし、且つ後悔でもしてゐるやうな様子であつた。そして彼れはかう叫んだのである。

「嗚呼私にも一人の娘がありますが、恐らくお前さんと同じ様な苦しみを受けてゐることでせう。お前さんの不幸を見て娘のことを思ひやります。こゝに私は黄金二十枚を持つてをります。これだけあればお前さんの慘酷な主人が要求する以上の金があると申すもの、次に來る者にお前さんの物語をするがよろしいと思ひます。さうすればお前さんが自由の身となることは保證しますよ」

タルシアはこのやうな慈悲深い取扱へを受けて非常に嬉しく思つたので、幾度も幾度も彼れにお禮

の言葉を繰返へした。しかし、彼女の話した事柄を、他人に傳へぬやうにして下さいと頼むのであつた。彼れはその要求に對してかう答へた。

さういふ話はいろく利害關係も多いことであるから、私自身の娘以外の者には決して他言致さぬ」

彼れはさう言うて、彼女の零落した有様を見て涙を流して其所を去つた。彼れは其所を立去るや否や一人の友人に遇つた。その友人は彼れを引留めて前記の婦人のことを訊ねた。王者は答へた。

「あれほどの女子は今の世に到底無いと思ふ。それにしても非常に氣の毒な者である」

若者が入つて來た。彼女は前と同様に戸を閉ぢた。

彼れは問うた。

「王者はお前さんに如何程與へたか」

女は答へた。

「黄金四十枚」



「では、ここに黄金一パウンドあるから、これを残らずお受けよ」

タルシアはこれを受取つた。しかし、彼女は彼れの足許にかぶんで彼女の境遇を説明した。アポリエータス(この若者の名)はこれを見て「さあ、お立ちよ。我々は皆人間である。人間である以上は皆不運な目に遇ふものですよ」と言ふのである。彼れは出て往つた。そしてアタナゴラスの笑つてゐるのを見たので彼れは言つた。

「貴殿は御親切なお仁なんだ。涙を流して保証してくれる者は私以外に無いのでせうか」

是等の言葉がこの事の真相を裏切る虞れがあつたから、彼等は話題を他に轉じた。そして他の者の來るのを待つてゐた。澤山の人が現はれた。しかし、彼等は皆涙を流して還つた。皆それらの所有金を彼女に與へて……

タルシアはレノーが彼女の買取代金として定めた金高を既に是等の人々から貰ひ集めたので、その金をレノーに見せつけて一刻も早くこの金で我身を自由にしてくれと請求した。

悪漢は言つた。

「金は全部持つて來て私に見せるんだよ」

翌日この悪漢は彼女がなほ依然として彼女の節操を支持してゐたことを知つて非常に憤つた。そして直に婦人監督者に彼女を委ねて不公平な處置を徹底せしめようとした。そこで彼女は彼れの現はれて來た時を見て、その足許に平伏して涙を流しながら次の如く愁訴したのである。

「私を憐れんで下さい。他人が皆私の不運に同情して下さいました。貴殿ばかりが私の願ひをお聞き下さらぬといふ譯は無からうと信じてをります。私は或る國王の女であります。何卒私の面目を汚さぬやうにして下さい」

悪漢は答へた。

「レノーは貪慾者だよ。自分で自分の爲すことを知らぬといふ譯さ」

タルシアは又言つた。私はいろいろの教育を受けた女子であります。何でも一通りは識つてをります。音樂のとは特に善く存じてをります。それでありますから、若し私を政廳通りにお伴れになりますならば、私は上手に私の藝を演じて御覽にいられます。又若し問題をお出しになりますれば、



どんな難問題でも私は解いてみせます。そしてかういふことをして私は十分お金を儲けてみせます。

悪漢は言うた。

「よし、それならばお前の希望通りのことをやらしてみよう」

人々は廣告を見て政廳通りへ雲集した。彼等は彼女の雄辯と美貌とに感動した。彼等の發する質問は悉く易々として答へられた。そして彼女は是等の手段に依りて物數寄な見物人から多くの金を得た。アタナゴラスも亦大に心配して彼女を見てゐた：：彼れの獨子に對すると殆んど同じ熱心さをもつてこれを目撃してゐたのである。彼れは婦人監督人に彼女のことをくれぐれも依頼して置いた。従つてその監督者は彼れから貰つた多くの賄賂に動かされて萬事好都合になるやうに取計つたのである。

アポローニアスのことを再び話さう。

アポローニアスは十四年目でタルサスの町に戻つて、ストラングリヨとダイオニシアスの家を突然訪づれた。ストラングリヨはアポローニアスの姿を見るなり狂人の如くその妻に叫んだ。

「今お前はどうするつもりだ。難破されたアポローニアスに御娘子が死亡されたと告げたではないか。今そのアポローニアスが娘を捜しに來てゐられるぞ。さあどうするつもりだ？」

彼女は答へた。

「馬鹿な人だこと。そのやうな事は何も心配するほどでもありませんまいよ。早速喪服を着て泣いてゐる眞似をすればいゝことせう。さうすればあの人は我が子が病氣で死んだと思ひますわ」

さう言うてゐるところへアポローニアスは入つて來た。夫婦の者が喪服を着てゐるのでアポローニアスは愕いて問うた。

「私が戻つたのを悲しむのですか、若しさうだとすればその涙は眞實の涙ではない」

妻は答へた。

「嗚呼悲しいこと。實はこのやうなことを物語るのは私以外の他の者が爲すべき譯であります、それを私が申上げなくてはならぬとは何といふ悲しいことせう：：實は、實は：：お姫様のタル



シア殿が急に死亡おかくれになつたので……」

アポローニウスは全身に震えを感じた。彼れは立像の如く身動きもしなかつた。

「御夫人よ、若し私の女がお話の如く死亡して仕舞ひましたならば、その金も、その衣類も無くなつて仕舞つたのでせうな……」

ダイオニシアスは答へた。

「固よりその幾部分は無くなつて仕舞ひました。しかし、貴下あなたから私達の申す言葉を信じていたゞき度いと思ひますから、確かな證據を御目にかけます。それは町の人達が貴下の御恩に報ゆる爲に、真鍮の記念碑をお姫様の追善に立てたことであります。これは貴下から親しく見ていたゞき度い物であります」

アポローニウスはこのやうに強ひられたので彼れの従者等に言つた。

「お前達は船に戻れよ。私は私の氣の毒な女の墓に參詣してくるから」

彼れは既に委しく記してあるところのその墓石上の碑銘を讀んだ。そして恰も彼れ自身の眼を呪詛するもの、如く、一種の精神上の發作的苦痛に襲はれて叫んだ

「この憎い、慘酷な眼が私の氣の毒な女の墓を見て涙も出さぬ位だ」

このやうなことを言うて彼れはその船に還つた。そして彼れの従者等に私を海中に投げてください、この世界が、亦この世界の中に在る一切の物が、私の目には皆不快の物となつて映つてゐるからと、かう叫ぶのであつた。

彼等はタイアーを指差して航海した。一時は順風が吹いてゐて好都合に船が進んでゐたがそのうちに天候が變つて來て著しく船の航路が變つて仕舞つた。しかし、僥倖にも無事にマチレナの港に入ることが出來た。マチレナにはなほ彼れの女が住んでゐたのである。港に入るや否や船上の乗組員は皆大きな聲を出して何か言うてゐた。アポローニウスは彼等にその原因を訊ねたところが彼等は答へていふには、

「マチレナの住民等は誕生日の祝賀を擧げてゐるところですから」



アポローニウスは嘆息した。そして部下の一人に言うた。

「誕生日を祝ふのは皆人のするところだ。それをなし得ぬのは廣い世界に私一人のみだ。しかし、私だけが不運な者であればそれで十分なのだ。私は黄金十枚を私の従者一同に與へて、この祝日を祝はせてやらう。但し善く注意して置くが、假りにも私の名を叫んだり、私の耳に聞こえるやうな所でお祝ひをするものがあれば、時を移さずその者の兩脚を折つてやるから……」

執事は必要なだけの金を持つて陸上へ買物に赴いた。そして必要品を買ひこんで船に戻つて來た。アポローニアスの乗つて來た船は他の船よりも美しかつたので、祝賀の宴はその船に於て盛大に行はれたのである。この時かの美人タルシアと戀愛關係になつてゐたところのアタナゴラスは海岸を歩いてゐるが、偶然にも王の船の近くに來た。彼れは彼れについて來た人々に「あの船は大に私の氣に入つたよ」と言うた。その船を動かしてゐる水夫等は彼等の持ち船がこのやうにほめられたのが嬉しく感じたものと見え、アタナゴラスを船中に招いた。アタナゴラスは船に入つた。そして食卓の上に黄金十枚を置いて「諸君から無料でお招きは受け度くありませんので……」と言うた。水夫等は大にその厚意を感謝した。彼等はアタナゴラスの或る種の質問に對して答へて言ふには、私等の主人は

非常に悲しんでばかりゐて殺してくれ殺してくれとばかり言つてゐる。それに妻子を外國で失はれましたので實にお氣の毒の次第でしてと語つた。アタナゴラスは従者の一人アルデーリアスに命じて私はお前に黄金二枚與へるから彼れの許へ行つて、この町の一人の貴族は御相談申上げ度いことがありますからと、かう傳へて來てくれ」と言うた。命を受けた者は斷つて言ふやう、

「黄金二枚貰つても兩脚を折られましてはつまらぬ話です。何卒他の者にこの役目をお命じになつて下さい。貴下は御承知でないかも知じませんが、私達の御主人は、側へ來る者があればその者の兩脚を折つてやるぞと申してをられますので」

この貴族は答へた。

「それはお前さん達に對してお作りになつた掟でせう。私にそれを守らせようとはお考へになつてをらぬこと、思はれる。では、私が自身でそのお部屋へ参りませう。時にそのお名前だけでもお前さん達から承つて行かう。何といふお名前であるの？」

彼等はそれはアポローニウスと申す名前であると教へてくれた。



彼れは獨語した。

「アポローニースだど？ ではあのタルシアが彼女の父を呼んでゐたその名前と全く同じだ」

アタナゴラスはアポローニースの前に現はれた。淋しさうにしてゐる人であつた。彼れの髭は組んであつた。彼れの頭髮は亂暴にかきむしられたまゝであつた。アタナゴラスは低い低い聲で「もし、もし、お久振りで、アポローニース殿」と言葉をかけた。アポローニースは船員の一名が物言うてゐるのだと思つたので、怒りの眼をあげてアタナゴラスを見た。彼れは水夫の代りに一人の上品な男が其所に立つてゐるのに今更の如く驚かされた。そして直ぐ彼れの席から離れて立ちあがつたのである。

部屋に入つて來た貴族は言つた。

「私のこのやうに突然お部屋に入つて來たので、お驚きになつたのも御尤です。私はアタナゴラスと申す者でこの都市の貴族であります。貴殿の船隊を見ましたのでついその堂々たる有様に心が惹かれました……特にこの船の美しいのに感心してをりましたところが船員が私を招いてくれましたので、この船に昇つて來たといふ次第であります。それから只今船員に貴下のことを問ひました

ところが非常にお悲嘆中の由で、實は御同情申上げてをりましたやうな次第。そこで私は何か私のでお慰め申すことが出來れば幸福だと存じまして、失禮ながらこゝへ推參致したやうな譯でござりまする。一刻も迅く御心の和らぐやうに……」

アポローニースは頭を擡げた。そして言つた。

「貴殿はどういふお仁であるにしても、ともかく何事も言はないで是所を去つて頂き度い。私は宴會の席に出るにはふさはしくありません。もうこの世に生きてゐるのがいやになつたのですから」

アタナゴラスは、この不幸な王者を慰めようと思つて一度は失望はしたものの、再び考へ直して大に同情を寄せた。彼れは甲板に戻つて使者をレノーに送つた。そして速にタルシアを是所へ送るやうにと請うたのである。これはタルシアの音楽と雄辯を以てすれば、王の心を和らげることが出來ると考へたからである。

タルシアは船に來た。アタナゴラスから内意をいろ／＼言ひ含められた。

「若しこの貴人の悲しみを和らげることに成功さへしてくれるならば、黄金三十枚、銀三十枚をお



禮にお贈り致さう。それから又三十日間レノーから貴女を解放してあげます」

乙女はこの仕事をやつてみることにした。彼女は其の悲しんでゐる人の側へ近寄つて訴へるやうな、そして又低い低い聲で囁いた。

「どうぞ、どうぞ、お心をはれやかに……」

彼女は樂器に合はせて面白く歌つた。その調は實に人間の心の奥底迄ひびく愉快な調であつた。アポローニアスは恍然として仕舞つた。彼女の歌は彼女が今日迄經驗して來た運命及びその事柄の成りゆき等を歌つたものであつた。亦彼女が不正直な者の掌中に陥つてその節操を破られようとして、然かも幸福にも純潔であり得たといふやうな事柄も、その歌の内容となつてゐるのである。

彼女は又つづけた。

「薔薇がその薊に依りて護られるのも亦このやうなものであります。私を運び去つた人々は、私を斬らうとしたところの悪人の劍を打落しました。私は畜生のやうなレノーから襲はれた時に私の節操を守ることが出來ました。心の傷は後迄も残りますが、涙の痕は消えます。私に残つてゐるもの

は皇室の血のみであります。貴殿は貴殿の涙と心配をお止めにならなくてははいけません。天を仰いでお心を天にお向けになるやうにお勧め申します。人間を造り、人間を救つて下さる者は神様であります。神様はその有徳な僕しもべに對しては無駄に涙を流させるやうなことは決してなさいません」

彼女が言ひ終つた時にアポローニアスは其の顔を熱心に見た。そして深い深い嘆息をもらした。

「嗚呼私ほど憐れな人間は何所にあらうか。この後未だどれほど長くこの悲しみに苦しめられるのだらう。それにしてもお前さんの御親切に對しては深くお禮を申して置く。若し今後私に張り切つた力が出て來るならば、お前さんのことを思ひ出して元氣をつけてゆくことになりませう。時に一寸聽いて置き度いがお前さんは皇室の血統だと言ひましたね？ では、誰れがお前さんの御両親でありますか？……いや、そのやうなことはどうでもよい……さあ、もうお前さん還つてもいゝよ。こゝに黄金百枚あるからこれを受取つて下さい。私にもう二度と物を言はないで下さい。悲しみが増すばかりだから……」

乙女は彼れのお禮の金を受取つた。彼女は船を去らうとした。ところがアタナゴラスは彼女を引



留めて言ふやう、

「何所へ往かうとするの？。未だ確なこともしないで……どうしてそのやうに冷たい心を持つてるのですか？。あのやうに自殺でもしようとしてゐる憐れなお仁を見てをりながら、それを助けようとも思はないで……」

タルシアは答へた。

「でも、私は私の力で出来るだけの事をやりましたわ。あの御仁は私に黄金百枚をお與へになりまして、もうよろしいから去れとお言ひになりましたのよ」

「お前さんがもう一度あのお仁の所へ戻つて行つて、貴下、私はお金を望む者ではありません、貴下の御健康をお祈りしてゐる者ですとかう言うて来るならば、黄金二百枚をお與へる」

タルシアはこれに同意した。彼女は國王の側に坐して話した。

「貴下が今迄通りに汚い有様をして御暮しにならうといふおつもりであるならば、私が一つお尋ね申上げ度いことがあります。私は今貴下にお問ひ申すことがあります、若しそれに對して貴下がお答へ下さるならば、私は直ぐお別れ致します。しかし若し貴下がそれに對してお答へが出来ぬやうであるならば、私は貴下から頂戴した贈物をお返へして是所を退きます」

「私が與へた物だけは保留して置いてよからうではないか。私はお前さんの要求してゐることを拒みません。假令私の不幸がどんな方法を用ひてもなほ見る見込みは無いにしても、お前さんの言はれることだけを聽いてみるつもりだ。だからどんな事でも問うて御覽なさい。そしてそれが終つたら是所から去つて貰ひませう」

「それでは私のお訊ね申上ぐることをお聴き下さい。この世界の或る所に彼方は方と跳ねまはつてゐる一つの家がありまして、其所だけは人間の入ることの出来ぬ場所であります。そしてその家は不斷に騒しい音を出してをります。その家の住人は固より沈黙してをります。しかし、不思議にもその家もその住者も一緒になつて動いてをります。さあ、若し貴下が御自身で名乗つてゐられるやうに一國の王様であるならば、私よりも御伶俐のこと、思ひますから、この謎は容易に解けるでせ



う」

アポローニスは答へた。

「私は詐欺師で無いことを証明する爲にお答へする。跳ねたり音を出したりする家とは海のことである。沈黙の住人とは魚類のことである。魚類はその家と共に動いてゐるものでせう」

タルシアは續けて言つた。

「私は森の丈高き娘から迅く迅く運び去られます。その者も亦多くの仲間を閉ぢ込めてをります。私は多くの路を滑つてゆきます。しかし足跡が一つも残りませぬ」

アポローニスは言つた。

「お前さんの問ひに對して私が答へつくして仕舞つたならば、こん度はお前さんの知らぬ事柄を私の方から澤山教へてやりませう。それにしてもこの様に年若くして鋭い又透き通ほつた知識をもつてゐるのは實に感心なものだ。澤山の人を閉ぢ籠めて、足跡を残さずにいろ／＼の路を通過してゆ

く樹木とは船のことである」

「一人の人物はさまざまの場所を害も受けずに通過してゆきます。中央に大きな火が燃えてゐて如何ともすることが出来ません。その家は露天のまゝのものではありません。しかしそれは裸體の人の住む家に適したものであります。若し苦痛を減ぜんとならば、火中に入らねばならぬものです」

「私はさういふ場合に風呂に入ります。そしてその風呂へ圓テーブルを利用して火を導き入れます。屋根のある家は裸體の住人に適してゐるものであります。裸體の者はかういふ場所にて汗を流します」

乙女はこの種類のことを言ひ終つてからアポローニスの前に彼女自身を投げ出して、彼れの兩手を押除けて彼れの體に抱きついた。

彼女は言つた。

「貴下に訴へる者の聲を聽いて下さい、乙女の祈りを貴んで下さい。それほどの智慧者が自殺することはよろしくありません。若し貴下が貴下の故夫人のことを思ひ出して悲しまれるならば、神が



慈悲をもつて、彼女を蘇生させて下さいます。又貴下がその死亡した子のことを悲しまれるならば神は新たに子をお授けになります。貴下は生活してゐる然かも満足してゐるべき義務があるのであります。

アポローニアスはこの乙女の執拗な態度に疝癩を起した。そして俄に立ち上つて彼女を足で追拂つた。彼女は倒れた。彼女は頬に負傷した。血は滾々として頬を傳つて流れた。彼女はその傷に驚かされて泣いた。そして叫んだ。

「お、天の御神よ、私の苦痛を何と御覽下さるか。私の母親は私を大海の怒濤の真中でお生みになつて直ぐ死亡されました。そしてその御遺骸は墓の中にすら休むことを拒まれて、小さな箱の中に黄金二十枚と共に納められて海中に投げられて、浪のまにまに流されてお仕舞ひになつた。しかし、この私は不幸にも後に残された私の父親の手に依りて、王者の子孫に似合しき貴重な品々と共にストランギリヨとダイオニシアスに引渡されました。私はこの兩人の爲に殺害されようと思いました。私が神様のお助けを祈つてをりますと、澤山の海賊が来て私を奪つたので、今迄私を殺害しようとしてゐた男は俄に逃げて仕舞ひました。私は是所へ連れて來られました。恐らく神様は何かの機會

を見て私を父親のアポローニアスの掌中に戻して下さいませう」

是所で彼女は言葉を終つた。王は彼女の物語を聴くや大に感に打たれて大きな聲で叫んだ。

「慈悲深き御神よ、天と地とを隈なく御照覽ありし、隠されたる物皆を現はし給ふその御慈悲こそ恭うござりまする」

かう言うて彼れは彼れの女の兩腕に抱かれた。彼れは彼女を強く強く抱きしめた。彼れは悦びの餘り聲たて、泣いた。

彼れは言つた。

「私の最愛の、そして又、たゞ獨りだけの可愛き子よ、お前は私自身の魂の半分であるのだ。私はお前を死んだ者とのみ思つてゐたのに再び見出したから、もう私は今から死ぬのは止めた。私はお前の爲に長く活き度いのだ」

彼れは倍々大きな聲を張り上げて彼れの部下の者に叫んだ。



「さあ皆の者は所へ集つて来い。私の不運もこれでいよいよ終つたといふものだ。私は今迄失つてゐたものをやつと取戻したぞ。私の子が、私の獨り娘が今私に戻つて来た」

この叫び聲を聞いて彼れの従者等は駈けて来た。貴族のアタナゴラスも彼等と共に是所へ走つて来た。彼等は國王が悦びに氣も狂はんばかりの有様で、彼れの女の頸にもたれて泣いてゐるのを見た。

王は叫んだ。

「それ、それ、これこそは私が日頃から思ひ出しては泣いてゐたその娘なのだ。この子は私の魂の半分だ。私は今から死なぬつもりだ」

こゝに集つた人々は皆彼等の主君の幸福を我が身の幸福のやうに思つて共に悦びの涙に咽んだ。

アポローニウスは今や喪服を脱いで王者の服に着替えた。彼れの従者等は皆言うた。

陛下よ王女は善くもかく迄陛下の御顔に似られたものでござりまする。これほど御血統を明かに示してゐるものはござりませぬ」

王女は悦んで父親に接吻した。父王は狂はんばかり満足の様子を見せた。

彼女は叫んだ。

「神様は私にお慈悲を與へて下さいまして、父上に再び會はして下さいのみならず、今日以後は父上と共に生活し、共に死ぬることが出来るやうにして下さいました。私はこの御恩は一生忘れません」

それより彼女は彼女の受けた不幸の出来事について委しく語つた。彼女が悪漢レノアの毒手に落ちて貞操を破られようとしたことや、丁度その危機一髪の際に神様が彼女をお助けになつたこと等は、皆こゝで彼女の口から話されたのである。

アタナゴラスは他人が彼女を妻に迎へ度いと申出すことを恐れたので、自ら王の前に平伏して、今迄彼れが彼女と結婚したい爲にいろ／＼彼女を後援してゐた事を説明して、是非とも彼女を私に與へて下さいと嘆願した。

アポローニウスは答へた。

「お前さんは彼女の悲しみを和らげ、又私の現在及び將來の幸福の方便となつてゐるのだから、私はその願ひを拒むことは出来ぬ。だから彼女をお前さんに與へませう。しかし、レノアはどんな恨



を私に抱くか分りませんぞ」

アタナゴラスは直に町に還つた。彼れは町の人々を集めて次のやうなことを話した。

「私達はたゞ一人の悪漢の罪惡の爲にこの町を滅し度くないと思ふ。私は美人タルシアの父親なるアポローニ阿斯王が是所へ到着してゐることを知つてゐる。彼れの海軍は今私達の目の前に來てゐる。彼れは彼れの娘を汚さうとしたところのレノーを己が掌中に引渡さぬならば、今にもこの町を滅して仕舞ふぞと嚇してゐるのである」

町の人々はこれを聞くより迅く、男といはず又女といはず、王の慈悲を願ふ爲に船を指差して出掛けた。彼等は先づ貪慾なレノーを捕へて後手に縛めた。そして彼れを引立て、王の前へ出た。王はレノーに對して大に怒つてゐたのである。アポローニ阿斯は今や王者の服を着け、髪を美しく刈り、王冠を被つて、彼れの女と共に裁判官の席に即いた。市民は彼れの宣告を聞かうとしてその周圍に立つた。

王は言つた。

「マチレナの人々よ、今日私は私の女を再び私の掌中に入れたのである。この女は危くも悪漢レノーに汚されようとした。この悪漢は如何に涙を流して嘆願しても、亦如何に黄金を贈つてみても、頑としてそれ等を拒絶し、どうにもして彼れの兇惡な志を遂げようとしたのである。だからこの都市の諸君が私の女の爲に仇を報いてくれるべきである」

人々は異口同音に叫んだ。

「レノーを生きながら焼き殺さうではないか。又彼れの財産はお姫様に献上致さう」

悪漢レノーは直ぐ引出されて火刑に處せられた。

タルシアは婦人監督者に對つてかう言つた。

「私はお前さんを許してやり度い。お前さんの親切と町の人々の御厚意で、私は汚されないうで済んだのです。私はお前さんに黄金二百枚お贈り致します」

レノーに買はれて來た他の少女等に對つても彼女はかう言つたのである。



「さあこれで皆の者も舊のことは忘れて自由の身となるのですよ」

アポローニウスは再び人々に向つて、彼れの希望通りに彼等が行つてくれたことに對してお禮を陳べたのである。又彼れは彼等に黄金五百枚を寄贈した。感謝の言葉が拍手の音と共に賑かに起つた。

彼等は町の中央に彼等の恩人の爲に肖像を建てた。その像の下には次の銘が刻まれた。

タイアーのアポローニアスの爲に、

我等の國の恩人たるそのアポローニアスの爲に、

又こよなき淨き姫タルシアの爲に、

彼れの美しき清き姫タルシアの爲に。

この後數日にして姫はアタナゴラスと結婚の式を舉げた。市民は皆心の奥から彼等の結婚を祝賀した。

アポローニウスはタルシア夫婦及び従者等を引連れてタルサスを経て己が本國に還へる豫定であつ

たが、天使は夢に現はれて是非ともエフェサスに立寄り、その地の殿堂を訪づれて、彼れが極めて若かつた時代からさまざまに受けたその苦しみやら、運命の逆轉やらを大きな聲で物語るがよいとお告げであつたから、その言葉通りにエフェサスに向つて航路をとつた。エフェサスに到着するや否や船を去つてその殿堂を搜索した。これは彼れの長い昔に死んだと思はれてゐた妻の退隱した場所であつた。彼れは王者としての盛裝をして、立派な従者を引連れて、威儀をたゞして、この殿堂に參詣したのである。美しく又しとやかな老尼がその殿堂にゐたので、皆の人々は我れ知らず尊敬の意を表した。しかし、その老尼の容子は何とはなしに意氣鎮沈してゐるやうであつた。アポローニウスは彼女の何人であるかを知らなかつた。彼れは彼れの娘夫婦の者と一緒に神前に跪いて、豫て天使よりのお告げにあつた如くに、彼れの經驗した苦難を物語つた。

彼れは話し出した。

「私は王者として生まれました。國はタイアー、名前はアポローニウスと申します。私は不正直な國王アンテオーカスの謎を解きましたが、それが爲にアンテオーカスは己が悪事の摘發者として私を殺害しようとしてました。私は逃げました。アルティストラテス王の親切に依つてその女と結婚しました。アンテオーカスの死するや私はその國の王位に登る爲に、私の妻を伴つて海路をその國



へと急ぎました。然るにその途中で妻は死亡しました。私は一つの箱の中に彼女の死骸を納め、黄金二十枚を入れて波のまにまに彼女を海上に流しました。又私はこの時生まれました娘を或者の保護に委ねました。然るにその保護者はその後全く心變りして彼女を虐待したのであります。私は埃及の遠い地に出発しました。十四年目で私は戻つて來て私の女に會ひました。私は彼女が死んだとのみ聞かされてをりましたので、それをそのままに信じてゐて、朝夕悲しんでばかり居りました。然るに結局彼女は私の掌中に還つたのであります」

彼れがこの物語を終る否やアルティストラテスの女は俄に彼れに縋りついて、彼れを兩腕に抱きかかへようとした。彼れはこの老尼が彼れの妻であることを心付かなかつたから、大に憤つて彼女を退けた。

女は泣いて言つた。

「貴郎、貴郎は、私の夫何故そのやうに私を冷たくお取扱へになりますのですか。私は貴郎の妻であります。アルティストラテス王の女であります。貴郎はタイアーの國王、貴郎はアポローニアス殿、私の夫君であります。貴郎は私にいろいろの事を教へて下さつたなつかしい夫君でありました。貴郎は難船の憂目に遭はれた私の夫君でありました。私は心の奥から、又、凡てその外の事を忘れて貴郎のことのみを朝夕思つてゐたのであります」

アポローニアスは是等の明かな事實を委しく聞かされたので、彼れの長い間失はれてゐたところのその妻のことを思ひ起した。彼れは彼女の頸に縋つて歡喜の涙にむせんだ。

「嗚呼このやうに妻と娘を再び私の掌中に戻してもらつたのも皆これ神様のお恵みである。辱い、辱い」

妻は問うた。

「でも、何所に娘が居りますの」

夫はタルシアを前へつれ出して彼女に答へた。

「それ、これがその娘なのだよ」



彼等は互に熱烈に接吻した。聽てこの幸福な再會の評判がこの町の全部に傳はつた。

アポローニスは彼れの本國に向つて出帆した。アンティオークに到着して彼れは王位に即いた。それより彼れはタイアーに急いだ。タイアーに到着してから彼れはアタナゴラス夫婦にその地の支配權を與へた。その後彼れは大軍を起してタルサルを攻めようとし、先づストラングリヨとダイオニシアスを捕へて彼れの面前に引立てしめた。彼れはタルサスの國民に訊問していふには、

「汝等は我が恩を忘れたのか」

彼等は異口同音に答へた。

「どうして、どうして御恩をお忘れ致しませうぞ。私達は皆陛下のお爲ならば死なうと迄考へてゐる者であります。この御像には私達が陛下から一命を助けていた、いたその顛末が書いてあります」

アポローニスは更に問うた。

「でも、私は私の娘をストラングリヨとその妻に委ねたのに、彼等は彼女を無事に私の掌中に返へさうとはしなかつたではないか」

ストラングリヨの妻はこの時叫んだ。

「陛下よ、そのやうなことは決してござりません、陛下はお墓の上に書いてある文字をお読みにならなかつたのですか」

王は娘を呼び出した。王女タルシアはストラングリヨの妻の側に來て言ふやう、

「珍しや御夫人、タルシアでござります、タルシアは墓の中から戻りました」

ダイオニシアスは震へた。市民は且つ驚き且悦んだ。タルシアは執事と呼んだ。

「セオフィラスよ、お前は私を知つてゐるか。誰がお前を使つて私を殺害しようとしたのですか正直に答へるんですよ」

「それは御夫人のダイオニシア様でござりました」

町の人々はこれを聞くや大に憤つてこの夫婦の者を町から曳きずり出して石責めの刑に處して殺し



た。彼等はセオフィラスをも殺して仕舞ひたかつたのであるが、タルシアが仲裁した爲に一命だけは助つた。彼女は言つた。

「若しあの折にセオフィラスが私にお祈りの時間を許してくれなかつたら、私は生きてゐてこのやうに今彼れの爲に仲裁することが出来ぬのだらうが」

アポローニヤスは是所に三箇月間滞在してゐた。そして市民に多額の金を寄贈した。その後ペンタポリリスに赴いた。老王アルティストラテスは彼等を悦んで迎へた。彼れは全一箇年間、彼れの息子、娘、孫と幸福に暮した。その後天命を全うして死亡した。そしてその王國を彼れの息子と娘に與へた。或る日アポローニヤスは海岸を歩いてゐた時、彼れがその昔、難破した折一命を救つてもらつた親切な漁夫のことを思ひ出した。そこで彼れは臣下の者に命じてこの漁夫を捕へて宮殿に伴へ來らしめた。漁夫は兵士に護衛されて王城へ引出されたので、これは必ず死刑に處せられるに相違ないと覺悟してゐた。彼れは國王の面前に引出された。ところが豈圖らんや、其所で國王は彼れに對して、私はタイアーのアポローニヤスだよと名乗つたのである。加之、國王は從者に命じて黄金二百枚をこの漁夫に贈つた。そしてこの外に男の僕と女の僕をすら彼れに與へた。彼れの親切はこれにとゞまらなかつた。彼れは一生涯この漁夫の爲にさまざまの厚意をつくしたのである。亦かのアンティオカスの陰謀をアポローニヤスに告げたところのエラミタスも、王の前に跪いて「陛下、臣エラミタスのこともお忘れにならぬやうに」と言ひ出した。アポローニヤスは手をさしのべて彼れを起した。そして彼れに多くの金を與へた。この後直に王子が生れた。彼れはこの王子を彼れの祖父アルティストラテスの後を嗣ぐ者として指名した。

アポローニヤスは彼れの妻と共に八十年間住んだ。そしてアンティオクとタイアーの兩國を治めた。彼れは彼れの苦難記を二巻書いた。その一卷はエフエサスの殿堂に、他の一卷は彼れの書庫に納めた。彼れは死後永遠の生活に入つた。我等の凡ても亦神様の無限廣大の御慈悲に導かれてこの永劫の生命を得ることが出来るものである。

〔考 證〕

この物語は本書の中で最も纏つた物語であるのみならず、その長さに於ては本書中最も大仕掛なものである。材料は既に第十一世紀乃至第十二世紀頃存在してゐたもので、小亞細亞沿岸の事柄が可成り多く混入してゐるやうである。英吉利第十六世紀以後の文學者はこの物語を材料とした者が多い。ガローヤシエクスピア等の作品中にこれと同じ型の物が可成り多いのである。



## 一五四、一種の天國

ジャーヴェースの語るところに依れば、エデッサの町には基督の聖像の餘威を受けて如何なる邪教徒も住むことが出来なかつたさうである。其所には如何なる偶像教徒も、或は猶太人も居らなかつた。野蠻人もこの町へは侵入することが出来なかつた。萬一、敵軍が現はれるならば無邪氣な子供が城門の前に現はれて或る信書を朗讀する。さうするとそれが朗讀されたその日に敵兵が平和を申込むか、或は俄に勇氣を失つて逃げて仕舞ふといふ風であつた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、エデッサの町とは天啓の町、即ち天國の都のことである。或は又それは我等の肉體を現はすことである。若し我等の肉體の内部に基督が住まはれるならば……即ち我等の魂が基督の愛で溢れるならば、基督を嫌惡する念は微塵も其所に存在するものではない。子供とは明かに澄みきつ

た心のことである。信書とは自白と悔恨のことである。

## 一五五、惡魔の敗北

ジャーヴェースの語つてゐることであるが、英吉利のイリーの寺領地界にカスビカと呼ぶ城がある。その直ぐ下方にヴァンルズベリーといふ有名な場所がある。是所はヴァンダル人がこの地方を掠めて慘酷にも多くの基督教徒を殺害して、彼等の陣營を是所に設けたことがあつたのでヴァンルズベリーの名が起つたのである。其所は圓い平野の丘上に在つて入口の道を除けば他の三面は皆堀をもつて圍まれてゐた。古い傳説に依るとこの平原は一つの不思議なところのある土地として一般に噂されてゐた。眞夜中に、特に月のかゞやいてゐる時、武士が大きな聲を出して何でも言ふと、直ぐに一人の騎士が現はれて来る。然かもその現はれて来る武士は武器を手にして戦ひの用意をしてゐるといふことであつた。そして二人の間に切合ひが始つて何れか一方が殺されるまでつゞくのである。この事柄は多くの人々から信じられてゐた話で、私自身もその地方の住民及び他の人々から聞いたことがあつた。



昔大英國にアルバートと呼べる、腕力の強い、そして凡ゆる事に秀で、ある一人の武士があつた。彼れは偶然に前記の城に入つた。そして非常に優遇された。冬の夜に食後大きな家族で常に行はれる如く、家庭の人々は悉く爐邊に集つて、さまざまの物語に時をすごした。彼等は終に前記の不思議な出来事を話題にした。そこでこの武士はたゞ噂だけを聞いたので満足することが出来ずして、先づ自身の事柄の真相を確實にしてからこれを信じようと考へた。で、彼れは名門の出であるところの一人の扈從を引具し、親らも武器に體を固めてその場所へと急いだ。彼れは丘に登つてから彼れの扈從を還してたゞ一人その魔の場所に入つた。彼れは大聲を張上げて叫んでみた。聲に應じて全身武装をした一人の敵が現はれて來た。さあ大變な切合ひが始つた。楯が水車の如くまはる、槍が箭を射る如く飛ぶ、騎馬が傷を受けて狂ひ出す、二人の騎士は跳ね落されるといふ有様であつた。彼等は二人ともに馬から落ちたので彼等の槍は折れた。彼等はその折れた槍で打ち合つた。しかし甲鎧が滑かなので、何の効果もなかつた。アルバートはこの時決然として彼れの敵を壓迫した。敵は倒れた。直に立ちあがつた。しかしこの時既にアルバートは敵の軍馬を捕へてゐたのである。敵は乗馬を奪はれて仕舞つたから、こん度はその折れた槍を握つて恰度飛び道具でも投げるやうな工合に、アルバートを目掛けて投げつけた。槍は慘酷にもアルバートの股に中つて大きな傷を與へた。しかし、アルバートは

既に敵の乗馬を分捕つて悦んでゐたのでその痛みを感じなかつた。又感じてゐてもそれを伴つてゐたのかも知れなかつた。敵は俄にその姿を消して仕舞つた。彼れはそれ故にその分捕つた馬を曳いて其所を去り、扈從にこれを渡した。この馬は非常に大きくして然かも輕快、その形は實に美しいものであつた。アルバートが城に戻ると人々は皆彼れを中心にしてこの不思議な物語を聽いて大に驚いた。彼等は一面に於てこの義俠的な武士の勇氣を賞讃すると共に、他面に於ては敵の武士の敗北したことを悦んだ。彼れは腿甲ももあてを脱したところがその一つは血の凝塊かたまりで眞紅に染められてゐた。家族の人々はこの大きな傷を見て今更の如く驚いた。從者は皆眠から呼び起こされて彼方は方へと派遣された。眠つてゐた者は皆起こされて是所に集つて來た。彼等は武士の大功をほめた、へた。分捕つて來た馬は手綱で固く縛つたまゝで群衆の見物に供せられた。人々は驚きの目を張つてこの馬を見物した。馬の兩眼は火の如くかゞやいてゐた。馬は傲然としてその頸を弓なりに曲げた。その毛は黒玉の如くかゞやいてゐた。そしてその脊の上には軍鞍が置いてあつた。人々が驚いて見てゐる間に聽て鶏鳴の時刻となつた。その時、馬は泡を吹いたり、跳ねたり、鼻嵐を吹いたり、脚で亂暴に地を打つたりして、聽て固く縛めてあつた手綱を切つて逃げ出した。人々は直ぐその後を追うたが見てゐる間に何所とも姿をかき消して仕舞つた。武士の傷はその後永く治ほらなかつた。毎年その格闘の日の夜になると必



ず疵痕が痛みだした。この武士はその後程なく大海を渡つて邪教徒征伐の軍に加つた。そして敵と闘つて勇しき最期を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は基督のことである。又その敵は驕慢の武器をもつて身を固めてゐる悪魔のことである。城とは世界のことである。

## 一五六、トロイの滅亡

オヴィッドはトロイ戦争のことを書いてゐるが、その中でかう言うてゐる。ヘレンがパリシに誘惑されて二人で逃げ出した時に、トロイの町はアキルズの死ぬ迄は決して陥ることが無いと豫言されてあつたさうだ。アキルズの母親はこれを聴くや否や、彼れに女子の衣を着せて、或る國王の婦人部屋に入れて其所で教育してもらつた。

ユウリセスはこの計略を見抜いたのでさまざまの品物、特に女子の悦ぶやうな飾品を澤山船に積みこんでその町へ赴いた。但し彼れはそれ等の婦人物の外に綺麗な武具を一組持参したのである。彼れはアキルズの住んでゐる城へ着するや否や、婦人部屋へ入つて是等の商品を陳列した。女子の眞似をしてゐたアキルズはこの綺麗な武具を見て大に悦んだ。そしてその中から槍を一つ取上げて、頗る武張つた様子でこれを振つてみた。

祕密はあばかれた。ユウリセスはアキルズを伴れてトロイへ出征した。ギリシア軍は大に勝利を得た。そしてアキルズが戦死した後、トロイの町が漸くギリシア軍の掌中に落ちた。敵の人質は解放された。

〔解説〕

可憐なる者よ、パリシとは悪魔、ヘレンとは人間の魂或は人類そのものを言うたのである。トロイとは地獄、ユウリセスとは基督、アキルズとは聖靈のことである。武具とは十字架、鍵、槍、冠其他の物のことである。



## 一五七、罪人の罰

或る皇帝は一人の非常に智慧の深い門番を使つてゐた。この番人は皇帝に熱心に願つて言ふには、僅に一箇月間でよろしいから私に一つの町の監督をお許し下されば、私はその町に入る者の入市税として、せじし 僂僂者、かため 片目者、かまふた 癩だらけの者、ヘルニア 歇兒尼亞患者各一名から必ず一片づゝ徴收致し度いですと物語つた。皇帝はその願ひを許し、且つその特權を承認する爲に印を押した證文をすら彼れに與へた。門番は直にその職に就いた。そして何人でもその町へ入らうとすると、その人物が不具であるかどうかを先づ第一に檢べてみた後、前記の條件にあてはまるものがあれば直ぐ一片の税を課した。偶々一人の僂僂者が或る日この町へ來た。門番は例の如く一片を要求した。ところが僂僂者は私は鏹一文でも拂はぬと言つて門番の要求に應じなかつた。門番は大に憤つて彼れを捕へた。そして偶然に彼れの帽子を引上げたところが驚くべし、この僂僂者は片目者であつた、そこで門番は直に四片の税を課した。然るにこの不具者は倍々威丈高になつて反對し、果ては逃げ出さうとした。門番は彼れを逃がさぬ爲にと頭を捕へた。帽子は離れた。驚くべく禿げた、そして癩だらけの頭が現はれて來た。

是に於て門番は三片を要求した。僂僂者は非常に怒つて倍々その要求に反對した。門番も同様に怒つた。二人の間に掴み合ひが始つた。僂僂者は終に兩腕をまくつて争つた。驚くべしその腕を見れば明かに癩病患者であつた。四片が當然要求された。掴み合ひが依然としてつゞいた。争つてゐる間に僂僂者は歇兒尼亞患者であることが明かになつて來た。そこで又一片加はつて合計五片の税が課せられた。このやうにしてこの不具者は、最初正當に拂ふべき義務ある一片の税を不當にも拂はなかつた爲に、結局彼れの素志に反して五片拂はなくてはならなくなつた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は基督のことである。門番は僧侶又は分別心のある懺悔聽取人のことである。町とはこの世界、患者とは罪ある人のことである。

## 〔考證〕

この物語はアルフォンサスの中にも見えてゐる。五つに不具者を分類して、それに對して一つ一つ或る寓意的教訓を配置しようとしてゐるあたりは極めて整然とした組織である。印度物語の形式を學んだものでなからうか。



## 一五八、魂の不滅性

昔、ローマ市の城壁よりも高い場所に、一つの死骸が腐敗することもなしに永い間埋めてあつたのが發見された。その死骸の上に次の句が刻んであつた。

「是所に一人の心の正しからぬ軍人の槍にかゝつて死んだところのエヴァンダーの子バラスなる者埋葬さる」

死骸の頭の所に蠟燭が燃えてゐて、その光りが水でも風でも消すことが出来なかつたものである。たゞそれはその火の下に針の尖端で造つた孔からもれて來る風のみで消えうるのであつた。

この人物の致命傷となつた疵は四呎半の長さのものであつた。彼れは巨人であつた。トロイ没落後殺されたので是所に埋葬されたのである。故に彼れの死骸は二千二百四十年を経た譯である。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、巨人とは一切の腐敗を免れるように造られたアダムのことである。この巨人を死に致らしめた傷は、神の命令に背いたことである。不斷に燃えてゐる蠟燭の火とは、永久の罰を指差したものである。この罰の火を消すものは針即ち基督の慈悲より外に無い。

## 一五九、酒の起原

ジョセファスは『萬物の起原』と題する著書の中で酒の起原を次の如く説明してゐる。

ノアーが森林の中で葡萄樹を發見した。その果實が苦味があつて、とても食べる事が出来なかつたので、彼れは四種の動物、即ち獅子、小羊、小豚、猿等の血を取つて混合し、これ等の混合液を土と混ぜて一種の肥料を作り、その肥料を葡萄樹の根に與へた。ところがこの混合血液は葡萄樹の果實を忽にして美味のものとなした。ノアーは試にこれを食べると直ぐ酔うた。彼れはそのやうな譯で、或る日例の如く酔うて仕舞つて、裸體のまま、横はつてゐると、彼れの次男はその有様を見て非常に嘲笑した。ノアーは彼れの子供を悉く集めて、彼れが如何なる方法を用ひて、この酒を造つたかを説



明した。これがそも／＼酒の起原である。

〔解説〕

可憐なる者よ、動物の血液で培養された葡萄は、その結果を説明してゐるものである。例へば獅子の血は怒を生じ、小羊の血は汚辱を、小豚の血は不潔を、猿の血はくだらぬ物數寄の心及阿呆らしい遊び事を悦ぶ心を生ずるものである。

一六〇、悪魔の誘引

悪魔が美しい天使の姿に變装して、人間の心に邪惡の思想を養はうとする例は決して珍しく無い。こゝにその最も著しい例が一つある。

ヴァレンタインがアールスといふ寺領區域の地を治めてゐた頃、その地の郊外に一つの城があつた。その城主の妻は教會へ來ると、未だ祈禱の式が終らぬ先きに常に教會を出て行くのであつた。彼女の

夫はこの奇癖を怪しんで、何とかしてその理由を見出さうと思つてゐた。或日のことであつた。聖書の朗讀が終ると直ぐ彼女は例の如くその席を立つて教會を去らうとした。そこで彼女の夫とその從者等は、彼女の非常に抵抗するのまははず、無理往生に彼女を抑留した。僧侶はそれから引續いて祈禱の式を舉げた。そして彼れがいよく奉獻式に入らうとすると、一つの惡靈は俄に立つ上つて禮拜堂の一部分を破つて逃げ出した。城主の妻は最早見えなかつた。

前記の物語が事實であることを證據だてる爲に、その塔の一部分が今日でも依然として立つてゐる。

〔解説〕

可憐なる者よ、城とは世界のことである。城主とは用意周到な懺悔聽取僧のことである。

一六一、神への感謝

英吉利國內に絶頂が人間の形に似た一つの小さな山があつた。山腹に森林があつて、其所は武士やその外の好獵者等が遊獵に出掛ける場所であつた。然るにこの山に登る者はその絶頂に來ると暑さと



渴に苦しめられて、無茶苦茶に休息を求めるのであつた。しかし場所の性質上、又職業の事情上、皆この丘にばかり登るのであつた。そして皆、或る他人に話しかけるやうな調子にあつた。渴したと言ふのであつた。その言葉を發すると思ひも寄らぬ時、山腹から一人の男が現はれて來るのであつた。快活な顔した男で、さし伸した手には黄金及寶石を鑲めた大きな角製の盃を持ち、恰もコップでも他人にすめるが如く、旨さうな、しかし何物だか分らぬ飲料をこれになみ／＼と入れて、その渴したと言つた人にこれを飲めと言つた。渴した人がこれを一口飲むや否や、暑さも疲勞も忽ち消えた。そしてそれと同時に仕事の苦しみを忘れて、却つて熱心に仕事に従事する勇氣が出て來るのであつた。臆てその飲料を飲みつくして仕舞ふと、従者は清潔なナプキンを持つて來て口を拭へとすゝめるのである。それが終ると彼れは報酬を受くることも無く、亦問答をするでもなく、さつさと其所を去つて仕舞ふのである。彼れは毎日々々このやうなことを繰返へした。彼れは可成り老人のやうには見えるが、その歩行は不思議なほど迅速であつた。

或る武士は偶々獵をする爲にこの場所へ來た。そして其所で渴を訴へたので例の如く飲料を與へられた。然るにこの武士はその盃を習慣及禮儀に従つて、これを彼れの終始一貫して倦むことなき前記の酒接待者に返却することなしに、自家用として使用する目的で盗み去つたのである。然るにこの武士の主君はこれを知つて大にその不都合なことを憤り、終に武士を窃盜人として處罰し、その盃を英吉利國王ヘンリーに獻上した。蓋し彼れも亦その武士と同罪たることを以て非難されることを心配したからである。

〔解説〕

可憐なる者よ、山とは天國のこと、森林とは世界、獵人とは俗人、渴と暑とは神聖な愛、角製の盃とは慈悲の泉に於て滿されるところの慈善、又この盃を所有してゐる者とは基督、ナプキンとは懺悔である。

一六二、呪詛を避くること

ティルベリーのジャーヴェースは非常に教訓的な有名な出來事を書いてゐる。

ローマ皇帝オットーの代にカタローニアのギローナといふ僧正領に非常に高い山があつて、其所へ登ることは容易なことではなく、特にその登り口はたゞ一箇所あるばかりで、その外の路からは到底



登ることが不可能であつた。絶頂に深さの分らない黄い水の湖水が一つあつた。傳ふるところに依れば、是所に悪魔の宮殿があつて、一つの大きな門は不斷に閉ぢられてゐた。しかし、宮殿も、その宮殿の中の住人も、等しく目には見えぬが存在してゐた。若し誰れでもこの湖水の中へ石又は他の堅い物品を投げるならば、悪魔は憤つて暴風雨を起した。

この山の一部分には雪や氷が不斷に積つてゐて水晶が山と重なつてゐた。又その麓には黄金の砂の上を流れてゐる一條の川があつた。このやうなことからこの山は寶石山とも呼ぶべきものであつた。山そのものは固よりのこと、山の附近一帯の地には銀が澤山あつた。この山の無限の富は實に驚嘆すべきものがあつた。

是所から遠からざる所に一人の農夫が住んでゐた。彼れは常に家庭の仕事で忙殺されてゐたが、特に彼れの少女が殆んど絶え間なしにぎやーぎやーいうてゐるので苦しめられてゐた。或日彼れは餘りにこれが爲に悩まされて疝癢が起きたので、この少女に悪魔の所へ往けと怒鳴つた。彼れはこのやうな不謹慎なことを言つた時、目に見えぬ手が現はれて來て、この少女を捕への何所ともなく運び去つた。その後七年、或る旅人はこの山の麓に沿うて歩いてゐたが、偶々前記の農夫の家の近くに來た。その時この旅人は一人の男が非常に悲しさうな聲を張り上げて、何か不平を言ひながら、恐しい速

力で飛んでゆくのを見た。彼れは足をとめてこの男を呼びとめてその理由を訊ねた。その男の答へるのを聞くに。彼れはこゝ、七年間といふものはこの山の上の悪魔に監禁されてゐて、毎日毎日馬車の代りに使はれてゐた。随つてそれが習慣になつて仕舞つて不用意の間にこのやうな叫びを出したのであるといふ話であつた。又その男はこの旅人がこれを知りて少しく疑つてゐる様子であつたので、更に一つの珍しい事實を語つたのである。それによると、彼れの隣人も亦同様の苦しみを受けてゐるといふ話であつた。その譯は、彼れの隣人はその少女に悪魔の許へでも往けと怒鳴つた爲に、その少女が直ぐ悪魔にさらはれて仕舞つたからである。しかし、彼れの語つたところに依れば、悪魔はこの少女を教へこむのに倦み果て、仕舞つて、若しこの少女の實父がこの山に登つて來て彼女を受取つてくれるならば、何時でも悦んで引渡すといつてゐたさうである。

この話を聞いた旅人は電光にでも打たれた者の如く驚いて仕舞つた。そしてこのやうな信じ難い事柄を他人に祕密にすべきものであらうか、或はそれとも聞いたまゝに他人に語るべきものであらうか。何れが正しいことであるかと考へてみたのである。結局、彼れはこの少女の現狀をその父親に告げることゝした。そこで直ぐ少女の家に向いてみると、父親は女の長い間の行衛不明のことを嘆息してゐた。彼れは先づ事件の眞偽を確實にした後、悪魔の馬車として驅使されてゐるところの人から聞



いたま、のことを、少女の父親に語り聞かせた。そして忠告した。

「さあ、さういふ譯なのだから、一時も迅く悪魔に請うて娘さんを返へして貰ふんですよ」

父親はこれを聞いて大に驚いた。彼れはいろ／＼とその救ひ出す方法について考へてみた。そして結局この旅人の意見に従うて行ふことに決した。彼れはその山に登つてから直に湖水の岸に赴いた。そして彼れの淺墓な考から彼れの少女を悪魔に與へたことの非を後悔し、何卒彼女を戻して下さいと悪魔に祈願した。忽然として一陣の暴風が吹いて來た。と見ると丈けの非常に高い一人の少女が彼れの面前に現はれた。彼女の兩眼はものすごくかゝやき、且つ落付きがなかつた。筋骨は殆んど皮膚も無いといふ有様であつた。言葉も人情も全く分らぬといふ有様で、たゞ怖しい容貌のみが其所に現はれてゐるといふ始末であつた。父親はこの有様に驚かされて仕舞つた。そしてかゝる女を彼れ自身に家に伴つて來てよろしいものであるかどうか分らなくなつて來たので、早速ギローナの僧正の許を訪れて、事の次第を委しく物語つて、大に心配さうにしてゐた。彼れは先づ僧正の助言を請うた。僧正は立派な宗教家であつて、その上、重大な事件には何くれとなく責任を以て當つてゐる人物であつたから、主領地の人々を一堂に集めてこの事件を具さに語り聞かせた。そして彼等に貴重な物を決して

悪魔に輕卒に與へるものでは無いと諭した。彼れは悪魔は人間の敵であつて、恰度兇猛な獅子の如く、人を捕へて食べるものであるのは固よりのこと、悪魔に與へられた者は悉く殺され、或は永劫の縛めにつながれるものであると教へた。

悪魔の爲に馬車として驅使された前記の男は、永年その憐れむべき有様をつゞけた。しかし、彼れはその後信仰心を起し、且つ分別心がついて來た爲に、この境遇から解放された。この男の語つたところに依れば、前記の場所の近くに大きな地下宮殿があつて、その入口はたゞ一つの門だけであつて、然かもそれが濃厚な闇でつゞまれてゐるとのことであつた。そしてこの門を通して悪魔が世界の各地に使して戻つて來た。彼等はその旅行中の出來事をその仲間の悪魔に物語つた。

この悪魔宮殿が何物を用ひて造られたものであるか、それは悪魔以外の者には分らぬ。亦彼等の爲に縛められて永劫の罰を受けた者のことも他人には分らぬことであつた。しかし、我等は是等の事實から推察して、我等の危険をほゞ斷定することが出来る。特に我等は悪魔の後援を求めたり、或は我等の家族を悪魔に與へることは大に警戒しなくてはならぬことである。

我等は自ら我等の心を護り、悪魔の爲に罪深き魂をとられて、永劫不滅の不幸の池にその魂を投げこまれぬやうに警戒しなくてはならぬ。かゝる池には雪も氷も溶けることが無い。……水晶の如く結



晶してゐて苦しめる。そして目ざめたる心を反射してゐる……永久の火をもつて不斷に燃えて……

## 一六三、極端な恐怖

アレキサンダーはセレスティナスと呼べるたゞ一人の王子を持つてゐた。王はこの王子を非常に愛してゐた。彼れはこの愛兒を立派に教育しようと思つたので、或る賢者を召出して「この兒を立派に教育してくれ、お禮は十分致すから」と言つた。學者は承諾した。そして王子を自宅へ伴れ還り熱心に教育した。

或る日のこと、この學者はその新しい弟子であるところの前記の王子と一緒に牧場を歩いてゐた。その時兩人は一頭の馬がいたましく疥癬病にかつて地上に横つてゐるのを目撃した。その馬の側に羊が二頭一緒に縛められたまゝで、傍に繁茂してゐた草を忙しうに食べてゐた。不思議な事にはその二頭の羊は馬の左右に分れてゐて、彼等を結んでゐる綱は馬の背を越して左右に來てゐるので、馬の腫物がその綱で擦られて非常な苦痛を彼れに與へてゐるのであつた。馬はこの痛みにたえかねて立上つた。しかし、これが爲に綱は左右の羊の重量で一層甚しく馬の脊を締めることになつた。馬は今

は苦痛の爲に狂ひだして大速度で走つた。勿論二頭の羊を氣の毒にも曳いていつたのである。馬は左右の抵抗力に正比例して苦しみを増すのみであつた。綱は次第々々に左右の羊の重量で馬の傷口に食ひこんで來て、もがけばもがくに從つて腫物の傷が苦痛を増すといふ有様であつた。

牧場の近くに製粉屋の家があつた。馬は傷の痛さに耐えかねてその製粉屋の家を目がけて狂氣の如く駆けた。そして二頭の羊をぶら下げたまゝでその家へ駆けこんだのである。家にはその時誰も居らなかつた。しかし、爐に火が燃えてゐた。四足の持主は蹄をけたて、爐の火をけちらしたので、俄に火事が起きて、その家は固よりのこと、馬も羊も皆灰爐に歸して仕舞つた。

先生は弟子に言つた。

「若き者よ、御身はこの事件の發端と眞中と結末を目撃したのであるから、これを題として正確な詩を書いて御覽。そして何故にこの家が焼けたのであるか、私に説明してみるので。若し御身がこれを首尾能く爲し得るならば私は必ず御身を嚴罰に處しますぞ」

セレスティナスは先生の不在中一心不亂にこの問題を考へてみたが、どうしても解決することが出來なかつた。彼れはこの事のみで悩まされてゐた。この時惡魔は例の如く、拔目なくこの機會を捉へ



て、人間の姿に身を變じて王子に會つた。そして言ふやう、

「何故そのやうに心配ばかりしてゐるのですか」

セレスティナスは答へた。

「何でもい、よ。お前の知つたことでは無いのだから」

悪魔は言つた。

「貴殿はそれを知らぬのですね。私に言へば教へてやるのに」

セレスティナスは終に悪魔に釣り出されて仕舞つた。彼れは言ふやう、

「實は私は先生から疥癬の馬と二つの羊といふ題で詩を作るやうにと命じられたのだが、い、考へ  
が出ないで困つてゐるところだ。若しこれが出来ぬとなると先生から嚴罰に處せられるのだ」

悪魔は答へた。

「若いお仁よ、私は人間の形に化けてゐる悪魔で、然かも詩を作ることにかけては天下第一の者で  
す。先生のことをそれほど氣にかける必要はありませんよ。今貴殿が私に忠實に事へるといふこと  
さへ誓つてくれるならば、私は貴殿の爲に實に面白い詩を作つてやりますよ。學者先生の作つた詩  
などはどうして比較になるのですか」

セレスティナスはこの誘惑的な言葉に迷はされて仕舞つて、若しその約束を悪魔が果たしてくれる  
ならば、自ら甘んじて悪魔の忠僕たるべしと誓つた。

悪魔は其の約束によりて直に次の詩を作つた。

痲かさねただらけのお馬の脊せなか

綱が食いたひこむ、あ、痛いた、痛いたや。

右と左に羊をつなぐ、

綱の重みでお馬が泣いた。



お馬はがたく、駈け出した、  
 二頭の羊をぶらりと吊て。  
 迅いぞ、迅いぞ、痴お馬、  
 俄に駈けこむ磨者のお家。

お馬があばれて火事が出た、

炎々燃えだす楠の焰。

痴お馬とぶーぶー羊、

うまく焼かれて焙肉。

お家大事といふことが、

磨者さんの御言葉。

だからお家と家畜の焼けたのは、

お還りあつて後のこと。

若者は悪魔に遇つてかういふ詩を作つて貰つたので非常に悦んで歸宅した。

師匠は言つた。

「この詩は窃んだのか、それとも自分で作つたのか」

セレスティナスは答へた。

「それは申すまでもなく私が作つたものであります」

彼れは前記の詩を讀んだ。師匠はこの詩が餘りに美しく出来てゐるので非常に驚いて叫んだ。  
 「かういふ詩を誰がお前さんの代りに作つたのであるか正直に言はなくてはいけませんぞ」

セレスティナスは答へた。

「誰からも作つてもらつたものではありません」



師匠は言つた。

「事實をどうあつても言はぬとあれば致し方が無い。血の流れ出る迄答で打つことに致すから」

若者は先生から打たれるのが恐しくなつたので一切の事を白状し、特に悪魔に事へることを約束したその顛末を物語つた。そこで師匠は早速僧侶の前へ彼れを伴れて行て、神の面前で一切の悪事を懺悔せしめ、且つ悪魔との約束を取消さしめた。

王子はその後信仰界の人となり、長壽を保ち、善事を澤山行つた後、大往生を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この王は基督、學者は教長、痲馬は罪で身體を掩はれてゐる罪人、二頭の羊は慈悲の綱で結ばれてゐる僧、磨<sup>こな</sup>磨<sup>や</sup>者の家とは現世界、火事とは誹謗のことである。

一六四、邪惡強情

基督とピーター聖者との會話を書いた書物の中に次の話が載せてある。

ピーター聖者は言つた。

「私は狂人とばかり思つてゐた五人の人に會つた。それは先づ第一の男は大海の砂を非常に貪食してゐた場合であつた。この男は口の中から砂が溢れ落ちるのも意に介せず、切りに砂又砂と口一つばいに詰込んでゐた。第二の人は、硫黄と瀝青で満ち満ちてゐる穴のほとりに立つてゐて、その耐え切れない悪臭を一生懸命になつて吸入してゐた。第三の者は赤く燃えてゐる爐の上に横臥してゐて、爐の火力が未だ十分でないから、寧ろ爐の中から出て來る焰その物を捕へて食べようとしてゐるのであつた。第四の者は高い殿堂の尖塔の上に立つてゐて、空氣を吸入しようとしてゐた。彼れはこの目的の爲に常に口を開き置いてゐた。第五の者は己が體の各部分を、口に入るに任せて貪食してゐた。そして口にそれを入れる毎に自らけらく笑つてゐた。多くの人々はこの五人の男を目撃して、何故このやうなことをしてゐるのであるか分らなかつた」

〔解説〕

可憐なる者よ、第一の男は貪慾者、第二は貪食及奢侈者、第三は富み且つ名譽ある者、第四は偽善



家、第五は善人を誹謗する者である。

〔考證〕

印度材料なるべしと思はれる。

## 一六五、同題

教祖傳の中に書いてある話であるが、一人の天使は或る僧侶に、三人の男がそれ／＼頑愚な狂態を演じて自ら苦しみを重ねてゐる有様を示した。第一の男は薪を造つてゐた。然るにこの男は薪が餘りに重くて彼れの方では到底運ぶことが出来なくなると、却つてその荷を澤山にして、それで却つて荷が軽くなると思つてゐた。第二の男は非常に深い井から苦心して篩で水を汲んでゐた。篩のことだから容易に水が一つばいにならぬのを一生懸命に同じことを繰返へしてゐたのである。第三の男は車に梁を積んで運んでゐた。そしてこの大きな材木を入口の狭く且つ低い門の中から家へ入れようとあせ

つてゐるのであつた。彼れは猛烈に馬を打つた、それが爲に彼れも、亦その馬も一緒に深い井の中へころけ落ちて仕舞つた。

僧侶に天使がこれを見せてから言つた。

「是等の三名の者について何と考へるか」

僧は答へた。

「何れも愚人であります」

天使は言つた。

「しかし、これは現世の罪深き人々の常である。第一の人は古い罪の重みに耐えきれぬからといふ理由の下で、毎日々々新しい罪をこれに加へてゆく人の場合である。第二は善事を行へども、これを罪深く行ふ爲にその結果が何等の恩恵ともならぬ人の場合である。第三は世俗的の虚榮を以て天の王國に入らうとして、却つて地獄に投げこまれる人の場合である」



## 〔考證〕

これも亦その材料は印度物と思はれる。

## 一六六、將棋

將棋盤には六十四の點が書いてあつて、それが八つ八つに分けてある。そしてその八つは夫、妻、花婿、花嫁、僧侶、俗人、金満家、貧乏人の四種類になつてゐる。勝負は六人でやることになつてゐる。第一はローチャスといふ名でそれが黒と白の二種になつてゐる。白は右手、黒は左手に置かれる。凡ての將棋の棋子がその場所に置かれると、上下何れの棋子も、その目標を目がけて進行を始めなくてはならぬことになつてゐる。但し是等の棋子がその進むべき途を遮られてゐる時は、それよりもさらに強いものか、又は弱いものを持ち出して来て、その前方の途を切り開らかぬ限りは、進むことは不可能である。又是等の棋子は進むにしても、退くにしても、直接に横切つたり、或は隅に動いたりすることは規則上出来ぬことになつてゐる。又若し反對の側から横面へこれを動して或る棋子を取るやうなことがあれば、その人は窃盜者として取扱はれることになる。

第二はアルフィナスと言ふもので、これは三つの點を飛び越えることが出来る。黒は王の右に置かれ、白はその左に置かれてゐる。但し是等はその色から白又は黒と呼ばれてゐるのではなくて、その位置からそのやうに銘名されてゐるのである。右の方へ進行して黒の空席に入りこむ黒棋子は農夫の前はその位置を占めることになつてゐる。しかし左方の棋子はそれ自身の力で二點を動かすことが出来る。一は右方の白い空席に向つて動き、他は左方の白の空席に向つて動くのである。かくの如くにして第三の棋子も亦盤上にその本來の位置を支持したまへ、第三の場所に動いてゆくことが出来るのである。故にもしそれが黒であるならば黒の場所に移つてゆく、又その反對のものならば反對の場所へと動く……角をなせる方向をとつて進むのである。

第三は武士の棋子である。その右手にあるのは白、又左手にあるのは黒である。白は三つの運動をなす。一は農夫の前に位置を占めて黒の席で右手に進むこと、二は羊毛梳人の前に位置を占めて黒の空席にあること、第三は左に進んで商人の場所に入ること、即ちこの三種である。そしてこの棋子が王の近くに位置を定めた時は、六つの場所を移つてゆくことが出来る。そして若しそれが中央に位置を定むることがあれば、八つの場所を移つてゆくのである。それは左の場合に於ても同様である。若



し又黒が王に相對立してゐる時、或は又白が王に相對立してゐる時は一緒に動く。そして一は女王の前に左衛として置かれ、他は王の前に右衛として置かれるのである。

第四は雜兵の棋子であつて、その運動はたゞ一つ、然かも皆同一様の運動しか許されてをらぬのである。是等の棋子はその置かれてゐる場所から第三番目の場所迄進むことが出来る。そして其所で固定したまゝで王の運動圏内にとゞまつてゐる。しかし、若しそれが王の運動圏内から外部へ出て仕舞へば一つの場所だけで満足してゐて、直線に進むのである。但しこの有様は退軍の時には絶對的に許されてをらぬ。しかし、出來得る限りの安全の位置を占めることは許されてゐる。若し是等の棋子が武士又は他の強い棋子から後援されて、己れ以上のもの、位置を占めるやうになれば、女王の恩恵を受けて更に大きな力を持ち得るのである。又若し是等の雜兵の棋子が右方に進んでゆく折に己れより資格の高い棋子や、或は賤しい格の敵が現はれて來て、然かもその敵が角の中にある時は、是等の雜兵棋子はその左右に於て是等の敵兵を捕へ、或は殺すことが出来る。しかし、是等の雜兵は苟も女王の力を得るにあらざれば、右にも左にも、自由な活動は決して許されてをらぬのである。

第五は女王である。女王棋子は白から黒へと動いてゆく。その位置は王の近くに定められてゐる。若しその位置を棄て、仕舞へば直に捕へられることになつてゐる。女王はその最初置かれたところの

黒の場所から移るならば、それはたゞ場所から場所へと動くに過ぎぬのである。然かもこの運動は進退共に、或は亦自ら他を捕へたり、或は他に捕へられたりする時にも、必ず角度本位である。しかし若し人ありて婦人はその性質が弱くて戦争を好まぬものであるにも拘らず、女王を戰場に出すのは何故であるかと問ふならば、我々はそれに對して夫が出陣する時は妻及びその他の家族の人々は陣中に生活するのは普通の習慣であると答へ度い。假令婦人は弓を使用することもなく、亦彼等が男子と争はんとする時は勇氣を以てせずして、寧ろ感情に依りて男子を征服するものであるとはいふもの、女王は王者を後援する爲に造られたものである。故に女王は彼女の愛情の切なるもの、あることを證據だてる爲には、王に従つて出陣するのが當然である。

第六は王の棋子である。この棋子は凡ての他の棋子に比してその進退は頗る特色がある。王は元來は黒であるが、白と共に第四の場所に位置を占めてゐることが出来るものであるが故に、彼れは白の空席にある武士アルフィナスの棋子を右手に持つてゐる。又その左手には相對立してゐる場所を支持してゐる。又王は他の何れの棋子よりも強く且つ威嚴を持つてはゐるもの、その王位から遠く離れた所へ移つてゆくことが不似合のこと、考へられてゐるのである。故に彼れはローチの棋子の如く彼れ自身の白の場所からその運動を起すのである。固よりそれは右と左からである。しかし彼れは黒の



空位を占めて左に位置を定めることは出来ぬ。即ち白のローチェスの場所に接近することは出来ぬのである。但し隅の場所に居るローチェスに近寄つて白の空席に入ることが自由である。其所には都市の番兵が置かれてある。随つて其所に來れば王は武士としての資格を持つのである。しかし、彼れは是等の二つの運動を女王の代りに爲すのである。

### 一六七、忠言を聽くこと

或る一人の射手が夜鳴鳥と呼ぶ一小禽を捕へてこれを殺さうとした。ところがこの鳥は人間の言葉を使ふことが出来たので、かう言ひ出した。

「私を殺しても何の利益もありませんよ。貴殿のお腹を満たすことも出来ませんよ。それよりは却つて私をお許しになれば、私はそのお禮に三つの事をお教へ申ませう。そして將來貴殿がその教へられた事柄を正直にお守りになれば、大きな利益をなさいますよ」





て仕舞つた。

射手は大にくやしがつて直ぐに網を張つてもう一度捕へやうとあせつた。しかし小鳥は巧みに逃げ

て言うて聞かせるが、私のお腹なかの中には駝鳥の卵よりも大きな眞珠が入つてゐるのだに」

「何といふ馬鹿者だ。お前のやうな間の抜けた男は今迄見たことも聞いたことも無かつた。今改め

小鳥は空中に飛翔しながら非常に節面白く囀つた。そしてその歌が一通り終つてから射手に言った。

射手は約束の如く小鳥の一命を助けてやつた。

「先づ第一は出来ぬ事をやらうと企てぬこと。第二は取返へしのつかぬことをくよくくと嘆かぬこと。第三は治ほる見込みのないことを治ほさうと試みぬこと。貴殿はこの三つの格言を善くお考へになつて正直にお守りになるならば、利益疑ひなし」

夜鳴鳥は言った。

射手は小鳥が人間の言葉を使つたのを見て驚いて仕舞つた。そしてその三つの教訓を授けて貰ふことが出来れば一命を助けてやると約した。





射手は言った。

「お前は善い鳥だから私の家へお出でよ。どんな事でもお前の爲ならしてあげるから。私は私自身の手でお前に食物を與へてあげるよ」

又何所へでもお前の好むやうに飛ばしてあげるよ」

夜鳴鳥は答へた。

「お前の阿呆なことはいよく／＼確かになつた。私から教へられたこと皆忘れてゐるやうな馬鹿者なんだもの……？取返へしのつかぬことをよく／＼と嘆かぬこと……それを忘れたの？。お前は馬鹿だよ私を二度と捕へることが出来ぬのに網を張つたではありませんか。又お前は私のお腹なかに駝鳥の卵より大きな眞珠があると思つたでせう……何といふお前は馬鹿者だね。私の體が駝鳥の卵より大きいと思つておられますか。お氣の毒様ですよ。お前は馬鹿で一生送るより外に途がないのだよ」

このやうな慰め半分の保證をした後小鳥は翔び去つて仕舞つた。

射手は悲しげに彼れ自身の家に戻つた。しかしこの後決して再びこの夜鳴鳥を見ることが無かつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、射手とは基督教徒、夜鳴鳥とは基督のことである。人間は基督を殺さうと試みるこゝとが恰度罪を重ねること、同様である。

〔考證〕

この物語の種本は『佛陀本生譚』(Barlaam et Josaphat)である。そしてこの印度物語がカックストンの作中に現はれたり (Caxton's Golden Legend)、アルフォンサスの作に現はれたり (Alphonse's Clerical's Discipline)、フランスの古詩『小鳥の歌』(Lai de Poiselet)となつたり或はリッドゲートの詩になつたりした (Lydgate's The Chorle and the Bird)

一六八、無間地獄



バーラームの話してゐることである。罪深き者はかの一角獣を怖れて後に引退いて深い穴に落ちた者と同様である。それにつきて不思議な物語がある。

或る一人の男は一角獣に食はれることを怖れて後へ後へと引きがたつた爲に深い窠に落ちて仕舞つた。しかし、彼れは其所へ落ちてから樹木の枝を捉へて漸く身體を支へた。ところが偶然下の方を見ると、今彼れが彼れ自身を支へてゐる樹木の根元に、底の知れぬ眞暗な井を見た。そして恐しい悪龍がその井をぐるぐると取巻いてゐた。龍は恰も彼れの落ちて來るのを待つてゐるやうに大きな口を開けてゐた。この樹木は白と黒の二つの壁の間にでもあるやうに、たゞ一本だけぬつと立つてゐた。そしてその根が不斷に悪龍の爲に噛まれてゐて、今にも龍の願ひの如く根元から倒れようとしてゐるのであつた。

彼れは眼を上方にそ、いでみた。その樹木の枝から旨さうな蜜が滴つてゐた。彼れはこの時全く彼れの危険を忘れてその一命にかゝはる不吉の蜜を嘗めた。この時偶々一人の友人は梯子を持つて是所を通りかゝつた。彼れはこの危険な男を助けてやらうと思つた。しかし、蜜の甘きに我が危険を忘れてゐた男は、その樹木に縋りついてゐて毫もそこから離れやうとはしなかつた。かゝる間にその樹木は倒れて仕舞つた。そして彼れは悪龍の口に落ちた。怪物は直に穴の底に隠れた。そして其所で彼れ

を食へた。彼れはかくの如くにして憐れむべき死を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、その窠に落ちた男は罪深き人のことである。一角獣は死、窠はこの世界、樹木は生命、その左右にはそれぞれ一つ一つの壁が立つてゐる。毒蛇の住める場所とは人間の肉體、悪龍とは悪魔下方の穴とは地獄のことである。蜜の實つてゐる枝とは罪の歡樂である。梯子を持つて來た友人とは牧師のこと、又梯子とは悔恨のことである。

〔考證〕

これも亦『佛陀本生譚』の中に現はれてゐる物語である。(Barlaam's Apologues in Damascenus's romance of 'Barlaam and Josaphat' 及び 'Calliah ve Dimnah' 第四章參照)

一六九、世渡りの道



トローガス・ボムペイアスはリグリアスといふ立派な武士のことを次の如く語り傳へてゐる。

リグリアスは己が領内の住民をして或る正しい且つ堅實な法律を……多少嚴刻な點もあつたが……守るやうに誓約せしめた。そして彼れはこの法律がアポローの御告に依りて出來たものであると言ひ觸らさうと企て、終にアポローの返事を持つて本國に還つたのである。彼れはその後クリートに赴き、其所で自ら好んで配所の生活をなした。しかし彼れが死亡した後、市民は彼れの遺骨を本國に持還つた。そして彼等はこの時始めてその主君に對して。誓つた事柄を無事に遂行しつくしたと考へたのである。是等の法律は十二箇條あつた。

第一條は君主に事へる道を説いたものであるが、同時に亦君主が人民の幸福の増進と、不正を壓することゝ力を致すべきものであることを説いたものである。

第二條は經濟の道を説き、戰爭に備へる道は飲酒に非ずして節儉にありと教へてゐる。

第三は賞與は功勞に比例すべきものであると説いたもの。

第四は施政の方法を分類して、王者は戦ひをなし、執政官は判斷を下し、元老院議員は罪人を調査することを説いたもの。亦この條に於て人民は彼等の支配者を選擧する權力を認められてゐる。

(第五條?)

第六條は土地の所有權と家督相續權に關する争ひの點を解決したものである。随つてこの規則に照らして何人も甲は乙より權力が多いといふことにはならなかつたのである。

第七條は一切の饗宴はこれを公開すべきことを命じた。その理由は奢侈に流れることを憂へたからである。

第八條は若い人々は一つの習慣で終始一貫すべきことを教へたもの。

第九條は貧しき青少年は農業に従事すべきものであつて、決して政事に關與すべきものではなく、



特に農夫としてはその初めの一二年間は出来るだけの苦しい仕事に當り、決して怠惰であつてはならぬと嚴命してゐる。

第十條は處女は結婚する時に持參金の必要なしと認められたもの。

第十一條は妻は金錢の爲に選擇すべきものに非ずと説いたもの。

第十二條は最大の名譽は必ずしも最大の富者に與へらるゝものにあらずして、却つて年長者に與へらるべきものであると説いたものである。

リグリアスは他人に率先して是等の法律を遵奉した。

〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は基督のことである。又この十二箇條の法律は基督御制定の道德の掟のことである。

一七〇、後悔

或る一人の賭博者が馬上のバーナード聖者に會つた。彼れは言つた。

「師よ、私は貴僧と一勝負をやつてみ度いのであります。貴僧はそれのお馬を、私は私の魂を賭けることに致しては如何でせう」

バーナードは直に馬から下りて答へた。

「若しお前さんが勝つたら私の馬を取つてよし。しかし私が若し勝つたらお前さんの魂を貰ひますぞ」

賭博者は承知した。そこで彼れは骰子を投げた。八點が出た。彼れは既に勝つたものと信じたのでバーナードの馬の手綱を取つてその馬を受取らうとした。僧は先づ暫と引留めた。そして言つた。



「私の方が澤山数を探ることになるのだに……三つの骰子を御覽よ」

彼れは十八の數を探つた。そこで賭博は魂をバーナードに與へた。これより彼れは清淨な生活に入り、その晩年を幸福に送つた後、大往生を遂げることが出來た。

〔解説〕

可憐なる者よ、この賭博者は俗人のことである。バーナーは思慮深き懺悔聽取僧のことである。彼れの馬は彼れの心である。三つの骰子とは三位一體のことである。

一七一、友情

一人は埃及に、一人はバルダック（バグダッド）に住んでゐたといふこの二人の武士のことについて、ペトラス・アルフォンサスは一つの物語を後世に傳へてゐる。

前記の二人の間に使者は屢々往復した。埃及にゐる武士はその國の珍しい事柄は一つも洩れなくそ

の友に報じた。同様にバルダックの武士はバルダック地方の珍事を具さに埃及の友に報じた。このやうにして兩人の間には親切の心が明かに表はれてゐて、未だ嘗つて不誠實の心の現はれを見たことは無かつた。

バルダックの武士が嘗つて臥床に横はりながら獨語した。

「埃及から手紙を送つてくれる私の友人は、私に對してその誠心のあるところを明かに表はしてゐるが、私は未だ嘗つて彼れに會つたことが無いから、是非とも私自身が埃及へ出掛けて行つて面會しなくてはならぬ」

そこで彼れは早速船を雇つて埃及へ赴いた。埃及の友はバルダックの友人がわざわざ訪づれて來たことを傳へ聞いて途中迄出迎へて大に優待した。

バルダックの武士は埃及の武士の邸に滞在することになった。其家に一人の比類なき美人が居た。バルダックの武士はこの美しい女に懸想して、終に病氣になつて日一日と健康が衰へてゆくといふ有様であつた。

埃及の武士は心配して問うた。



「どうしたのですか。健康がすぐれぬやうに見受けるが……」

バルダックの武士は答へた。

「貴殿の家族の中の一人の婦人にこの私の心が執着を感じてゐるので……私はその女と結婚しなければ恐らく死んで仕舞ふやうにならうかと思ふ……」

家庭の人々は皆呼び出されて……問題になつてゐる乙女だけは例外にされて……病人の面前に集つた。病人は一わたり是等の人々の首實檢をやつてから叫んだ。

「是等の人々には用が無い。未だ私が是等で見ない者が一人ある譯だ。その女こそは私自身の魂のやうに、私には大切な者なのだ」

止むを得ずその美しい女が呼び出された。バルダックの武士はこの女こそは私の一命を左右する女だと言つた。埃及の武士はこれを聞いて言うには、

「實はこの女は私の妻にといふ考へで今日迄育て、來た者である。私がこの女を私の妻とすれば、大きな財産までも私の物となるのだ。しかし、私は今私の友人であるところの貴殿の一命を救つてやる爲に、この女と又その富とを悉く貴殿に與へてやる」

病人の武士は非常に満足して早速この美人と又その財産を受取つてバルダックへと戻つた。

この後久しからずして埃及の武士は非常に貧乏になつて仕舞つた。そして今は住むべき家すら無くなつたのである。で、彼れは考へた。

「私はこれよりバルダックの友人の所へ往く方がいゝやうだ。彼れには多くの金を與へたこともあるのだから、これから彼れを訪づれて私の貧乏してゐる有様を訴へてみよう」

彼れは出發した。日没後少し経てからバルダックに到着した。彼れは獨語した。

「もう夜のことでもあるから、そして特に私はこのやうに貧しい衣を着てゐるのだから、彼れの家を訪づれても私を昔の友人だとは思つてくれぬかも知れぬ。あのやうに大きな家に住み、多くの人を使つてゐる私がこのやうに貧乏生活をしてゐるとは、到底彼れが思ひも寄らぬことだと想像さ



れる……だから私は今夜は休んで明朝彼れの大きな家を訪づれることに致さう」

偶然墓地の方を見たところが教會の門が開らいてゐたので、其所で一夜を明かすことに決心した。然るにさといよく其所の庭で眠らうとすると、二人の男が其所へ入つて來て大きな喧嘩を始めた。そしてその一人が殺害されて仕舞つた。加害者は直に墓地に逃げ込んで其の方向から何所ともなく姿を隠して仕舞つた。程なく全市中に大きな騒ぎが持ち上つた。人々は口々に「人殺しは何所へ逃げたか。反逆者は何所へ往つたか」と叫ぶのであつた。

埃及の武士は何を思つたか急に叫んでいうには、

「私はその人だ。私を磔刑に處してくれ」

人々は彼れを捕へて牢に入れた。

翌朝警鐘が市中に鳴りわたつた。判事は埃及の武士に磔刑の宣告を與へた。彼れの死刑に處せられるのを見物する爲に集つて來た人々の中に前記のバルダックの武士もゐた。バルダックの武士は今處刑場に引かれてゆく男が己が古い友達に餘りに善く似てゐるので非常に驚かされたのである。彼れは叫

んだ。

「彼れが磔刑に處せられ。私が生きてゐる？ いや、そのやうな不義なことは私にはどうしても出來ぬのだ」

「彼れは大きな聲で叫んだ。

「さあ皆さん、罪の無い人を殺すのではないぞ。殺害したのは私だ。その人ではないんだから……」

人々はこの言葉に満足して直に彼れを捕へた。そして兩人を刑場に伴つた。二人の武士が今や刑を受けようとしてゐた時、偶々實際の下手人が此所を通りかゝつたのでこれを見て次の如く考へた。

「私は罪の無いのに血を流させてこれを傍觀することは出來ぬ。そのやうな事をしては早晚神様の罰を受けるに相違ない。だから私は來世に於て永久の罰を受けるよりも、寧ろ現世で短い間の罰を受ける方がましだ」

彼れは大聲を發して叫んだ。



「皆さん、何卒罪の無い人を殺さないで下さい。被害者は何の豫定の計略も無く、亦誰であるかも知識らないで殺されたのです。私だけが加害者であるのです。この二人のお仁は何の罪もありません」

人々はこの言葉を聴くや直ぐこの男を捕へて判事の前に連れて行つた。判事はこの有名な二人の罪人が人々と一緒に戻つて来たのを見て大に驚いて何故戻つて来たかと訊ねた。人々は事柄の顛末を委しく判事に物語つた。判事は最初の武士に問うた。

「何故お前は自分から殺人者だと名乗り出たのであるか」

彼れは答へた。

「閣下、正直なところを申し上げます。私は私の本國に於て金持でありました。私の欲する物は何物でも私の所有になりました。然るに私は是等の物を悉く失つて仕舞ひました。家もなければ家族もなくなりましたので、我ながらなさげなく感じました。私は何とかして救済の途を得度いと考へました。私は今死を欲してをります。何卒私を死刑に處して下さい」

判事はバルダックの武士の方に向いて問うた。

「然らばお前は又何の必要あつて加害者だと名乗るのか」

彼れは答へた。

「閣下、この武士は豫てから彼れ自身の妻となさうと思つて養つてゐた一人の美人を、私に妻として與へましたのみならず、澤山の財産をすら彼女と一緒に私に譲つてくれたのであります。さういふ恩誼が私にありますので、私はこの恩人がこのやうな不運の目に遭つて、今にも刑場の露と消えようとしてゐるのを見ましては、到底これを黙視することが出来なくなりました、かくは自らその加害者を以て任じて名乗り出た次第であります。私は彼れを愛する念から自ら安んじて死に就かうと思ひます」

判事は眞の殺人者に言うた。

「然らばお前は何と答へるか」



彼れは答へた。

「私は事實を申し上げようと思つてをります。若し私がこの二人の正直な武士を私の誤謬から殺すやうになりませうものなら、今後私は天罰を受けても止むを得ぬこと、思ひます」

判事は答へた。

「お前はそのやうに事實を白状し、且つ罪の無い武士の生命を助けたから、今よりは一心不亂に神を念じて、お前の來世を善くすることを考へるがよい。私はこの機會をお前に與へる爲にお前の一命を助けてをく。安心して此所を去るがよい」

人々は皆判事の裁斷を賞讃し、特に眞犯人の罪を許したことに對して大に感動した。蓋し加害人が二人の罪無き男を死から助け出したのは、これ全く加害者の寛大な心に依るものであつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は神、二人の武士は基督と我等の祖先のことである。美しき乙女とは魂、死人

とは肉慾の爲に殺された心である。

一七二、終始一貫

英利吉國の或る王の時代に二人の武士があつた。その一人をギドー、他をティリアスと呼んだ。前者は多くの戰爭に出で常に勝利を得てゐた。彼れは或る貴族の美しい乙女を懸想したが、彼女の爲に多くの敵を征服する迄は到底彼女を己が妻として迎へることは出来なかつた。彼れは終に或る特殊の武功を樹て、彼女の満足を買ふことが出来た。そしてこゝで始めて彼女と盛大な結婚の式を擧げた。結婚後三日目の夜、丁度鷄鳴の頃であつたが、彼れが臥床から起き上つて天空を仰いだ。最も綺麗な星の間につ、まれて我等の主基督は鮮かに彼れの目に現はれた。そして基督は彼れに次の如く言葉をか

けた。  
「ギドーよ、ギドーよ、お前は一婦人の愛を得ようとして大に奮闘した。しかし今やお前はその決心を以て私の敵と戦ふべき時である」

さう言つて我等の主はその姿をお隠しになつた。



ギドローはこれは必ず私に聖地に出征して邪教徒を征伐せよとお意であると思つたので、直に彼れの妻の側へ戻つて来て次のやうに言うた。

「私はこれより聖地へ行くことにした。若し幸にして私等夫婦の間に子供が生れたならば、私の無事に還つて来る迄大切に育て、くれ」

夫人はこれを聞くや大に驚いて、恰度狂人の如き態度で臥床から跳ね起き、そして臥床の枕元に置いてあつた短刀を握つてかう言ひ出した。

「何とお言ひになるの？ 私は常に貴郎のことばかり思つてをりました。貴郎が戦争にお出でになつて世界中にその譽れを上げてゐられる間にも、私は常に私達の結婚の日の近づくのを指を折つて楽しんでゐたのであります。それほどにしてやつと夫婦になることが出来たのに、今私を棄て、聖地へ往かうとお言ひになるのはどう言ふ譯なのです？ 若し貴郎がどうあつても往かうとお言ひになるならば私はこの短刀で自殺致しますから……」

ギドローは起きた。そしてその短剣を奪ひ取つて言ふやう、

「お前がそのやうなことを言ふので私は驚いて仕舞つた。しかし私は聖地へ往くことを神様にお誓ひ申したのだ、今ほど善い機會は二度來ぬと思ふ。老人になつては逆もこのお役目は勤らぬのだから、それ故お前も心を靜にして決してそのやうに狂氣の有様を私に見せてくれるな。直ぐ還つて來るから……」

この保證を得て夫人はや、慰めを得たので彼女の指環を彼れに與へた。そして言ふには、

「この指環を記念にお送り致しますから、途中でこれを御覽下さいまして私のことを思ひ出して下さい。私は辛棒して貴郎のお還へりをお待申してをります」

武士は彼女と別れてティリアスと共に本國を出立した。夫人は夫と別れてから永い間悲しんでばかりゐて、どうにも慰めやうが無かつた。聽て彼女は美しい男兒を生んだ。そして一生懸命にこの兒を養育してゐた。

かゝる間にギドローとティリアスは多くの國々を通過した。彼等はデシア王國が既に邪教徒の爲に征服されたことを傳聞した。ギドローはその友に言ふやう、



「貴殿はデシア國に入つては如何ですか。その國の王は基督教徒であるから貴殿の全力を擧げて彼れを助けてやつて下さい。私は聖地に進ませう。そして私が基督の敵を征伐して仕舞つたなら直ぐ貴殿の許へ戻ります。英吉利へ還へる時には兩人一緒に参りませう」

彼れの友は答へた。

「貴殿の御意見通りに萬事致しませう。私は先づこの國へ入りませう。若し貴殿が御無事であつたら私の許へ来て下さい。兩人一緒に本國へ凱旋致し度いですから」

ギドーは固くこの事を約束した。そして彼等は接吻を交換して互に別離を悲みながら左右に別れた。一人は聖地に、他はデシア國に。

ギドーはサワセン人に對して幾度となく戦争を開らいて常に勝利を得てゐた。彼れが勇名は世界の際涯迄もひいた。同様にティリアスも亦戦争には幸運兒であつて、デシア國內から邪教徒を驅逐することに成功した。デシア國王は他の將士の何人よりもティリアスを最も多く賞し、特に彼れに贈るに漠大の財寶をもつてした。然るにその頃同じ國にプレビウスと呼べる一人の亂暴貴族が住んでゐる

て、ティリアスがこのやうに榮達するのを見て大に嫉妬した。そこで彼れは國王に讒言してティリアスが王位を奪はんとしてゐると言つた。國王はこの言葉に欺かれて終にティリアスの持つてゐた一切の名譽を無慈悲にも奪ひ取つて仕舞つた。ティリアスはこれが爲に非常に貧困となり日常の生活にも窮するといふ有様であつた。彼れは己が不幸を嘆じてゐた。「嗚呼私は何といふ不運な者だらう。これから先き私はどうなるのだらう」……彼れはいつもこのやうに言ふのであつた。

ギドーはティリアスがこのやうな不運の目にあつてゐることを知らずして、普通の旅行者の服を着けてたゞ一人旅程に上り、途中で偶然にもティリアスに遇つた。ギドーは迅くもその遇つた男がティリアスであるといふことを見破つたが、ティリアスの方では、この旅行者がギドーであるとは想像もしなかつたのである。ギドーはわざと己が素性を隠してたゞティリアスに近寄つて「貴殿は何所から？」と訊ねたのみであつた。ティリアスは未だこの旅人がギドーであることには心づかなかつたのである。それ故彼れは次のやうに答へた。

「私は外國から参つた者です。しかしこの國には多年住んでをります。私は昔私の一人の友人と一緒に戦争に出たものでありますが、その友人は聖地へ参りましたので生死のほども分りません。亦其後どうしてゐるかも私には分らぬのであります」



ギドーは言った。

「では、失禮ですが、貴殿はそのお友達の爲だと思つて、貴殿の膝を枕に私を暫時眠らして下さいませんか。私は大層疲勞してをりますから」

ティリアスはこれを快諾した。ギドーは直に熟睡した。

ギドーが眠つてゐる間に彼れの口が自然に開らいた。ティリアスはその口の中を見てゐると、不思議や一つの白鮎がギドーの口の中から出て來た。そして近くの山をさして走つた。やがてその山の中心へ姿を隠して仕舞つた。暫くするとその白鮎が戻つて來て、再びギドーの咽喉へ入つて仕舞つた。ギドーは直ぐ目を開けた。そして言った、

「どうも不思議な夢をみましたよ、私の口の中から鮎が一匹出て彼方の山に入り、それが又戻つて來て私の口に入つたのですもの」

ティリアスは答へた。

「これは不思議だ。それなら私が今この目で明かに見た事實なんですもの。しかし、その鮎が彼方

の山で何をしたのか私には全く分りません」

ギドーは言った。

「では、二人であの山へ登つて調べて來ようではありませんか。何か利益になることがありますかも知れんから」

兩人は鮎の入つたその山へ登つてゆくと龍が死んで横はつてゐた。そして黄金がその龍の腹に一つばい満ちてゐた。亦一口の名刀も其所にあつた。それには次の銘が刻んであつた。

「ギドーはこの名劍をもつてティリアスの敵を殺すべきものなり」

旅人に姿をやつしてゐたギドーはこれを見て大に悦んで言った。

「私の友よ、この黄金は貴殿の物である。しかし、この名劍は私が頂戴致しますから」  
ティリアスは言った。

「いや、いや、私はこの大金を受取る資格はありません。何故貴殿は私にこれを與へようとなさる



のですか」

ギドーは言うた。

「貴殿、善く目を開いて御覽下さい。私は貴殿の友人なんですよ」

ティリアスはこれを聞くや善く目をみはつて彼れの容貌を見た。そして彼れがこの旅人はまがふかたなき彼れの武道の友であることが分つたので、悦びの餘り地上に伏して泣いた。彼れは叫んだ：「もう十分だ、十分だ。私は十分生きながらへた……貴殿にお會ひ申すことが出来たのだから……」

ギドーは慰めて言ふやう、

「さあ、立つて下さい、迅く、迅く、私の來たのを見て泣くよりも寧ろ悦んでくれなくてはならぬのだ。私は貴殿の敵を倒して二人で英吉利へ凱旋しようと思つてをります。しかし私の身元を誰にも言はぬようにして下さい」

ティリアスは起き上つた。彼れはギドーの頸に抱きついて接吻した。それから彼れは黄金をかき集

めてその家に戻つた。

ギドーはティリアスと途中から別れて直ぐ國王の城を訪づれた。門番は彼れの來意を訊ねた。ギドーはその門番に私は只今聖地から戻つて來たばかりの者でありますと答へた。直に彼れは謁を賜はつた。國王の面前に出て見ると、前記の奸物貴族……ティリアスの名譽と富を奪つたその貴族は、國王の側に坐つてゐた。

國王はギドーに訊ねた。

「聖地は平靜か？」

ギドーは答へた。

「左様でございます。目下無事でござります。基督教に歸依した者は澤山ござります」

王は問うた。

「お前は聖地で英吉利の武士でギドーとか言ふ有名な勇士に會つたことがあるか」

ギドーは答へた。



「陛下、その勇士には幾度も會つたばかりでなく、食事を共にしたこともあるほどで」

王は問うた。

「基督教國の王者について何か噂を聞いたことが無いか」

ギドーは答へた。

「それはありました。陛下のお噂も承知してをります。或る人の申しましたには、サラセン人及びその他の邪教徒が陛下の御本土を占領してゐたのを、ティリアスとか呼ぶ立派な武士が勇を振つて征伐し、終にその奪はれた國を陛下の爲に取戻したので、陛下はその武士に多くの富と名譽をお授けになつたと、かう噂してをりました。然るに又他の者の噂さでは、陛下はこの武功あるティリアスの掌中から前記の富と名譽を皆奪つてお仕舞ひになつたとか言ふことで、然かもそれは皆、プレビアスとか言ふ武士の毒舌に陛下が迷はされた結果であるとか申してをりました」

プレビアスは怒鳴つた。

この偽りの旅人め！ 汝は生意氣にもそのやうな嘘偽を申すからには、それを辯護するだけの勇氣があること、思ふが？ 若し果してそれだけの勇氣があるなら私と決闘するか？ ティリアスと言ふ奴は打棄て、置いたら必ず王位を奪つたかも知れぬのだ。彼れは反逆者であつた。名譽を失つたのは當然だ」

ギドーは國王に對つて言うた。

「陛下よ、あの人は私のことを嘘偽を申す旅人だとか、或は又ティリアスは反逆人であるとか言うてゐられますから、私は決闘を申込み度いのでございます。あの人の言ふことが却つて嘘偽であることをその體の上に於て證據だて、みますから」

王は言うた。

「お前の決心のあるところを聽いて満足した。取消しを要求せぬやう注意しますぞ」

ギドーは言うた。



「では、陛下、お願いでございますから私に武器をお與へ下さい」

王は答へた。

「お前の欲しいと思ふ武器は何なりと與へてつかはずぞ」

王は決闘の日を指定した。そして彼れは旅人ギドーがかゝる間に裏切る者の奸計に陥つて殺害されることを心配したので、密かに彼れの娘を呼んでかう言ひ含めたのである。

「お前はあの旅人の生命を心配してゐるやうだから、萬事抜目のないやうに彼れの爲に注意してやつてくれ。何事にも不自由のないやうに……」

王女は父の命に従つて彼れを彼女自身の部屋に伴れて來た。そして彼女自身の手で彼れに沐浴をつかはせ、或は又凡ゆる必要な準備を彼れの爲に爲したのである。

愈々決闘の日が來た。プレビアスは堅固に武装して城門に來た。そして大きな聲で叫んで言ふには、  
「嘘偽つきの旅人は何所にゐるか？ 何故愚圖々々してゐるのだ。ギドーはこの言葉を聞くや甲鎧

を着て決闘場に入つた。兩人は猛烈に闘つた。プレビアスは渴して死ぬほど苦しかった。若し水を飲まなかつたらこの時既に殺されたのであつた。彼れは彼れの敵手に言葉をかけた。

「お前が若し親切にも私に水を飲むことを許してくれるならば、私も亦お前の渴した時にその時間を與へてやる」

ギドーは答へた。

「よろしい飲んで來るがい、よ」

プレビアスは渴を醫してから決闘が以前よりはもつと猛烈に行はれた。そしてプレビアスの元氣は實に素晴らしいものがあつた。これに反してギドーは程なく大に渴を感じた。「彼れはプレビアスに與へたと同じ親切を彼れにも與へてくれと要求した。然るにプレビアスは飲みたかつたら私に勝つてからのゆつくり飲め、それ迄は水を飲むことは許さぬぞ」と言ひ放つた。ギドーはこの恩知らずの返答を聞いて大に憤つては見たもの、この場合に於てどうすることも出来なかつたから、出来るだけ己が體を保護して、次第々々に水の流れてゐる所へ敵を誘つて來て、いよいよ水の傍へ來た時俄に身を



躍らして水の中へ飛びこんだ。そして腹一つばい水を飲んだ。その後水中から出て来て猛烈に悪漢を攻撃した。この時のギドーは恰度獅子の怒り狂つてゐるのに髣髴たるものがあつた。プレビアスは終に逃げ足になつて漸く殺されるのを免れた。國王はこの有様を見て兩人を左右に引離した。そして今夜は二人を十分休息させて明朝再び勝負を決するやうにと命じた。

旅行者ギドーは再び己が部屋に戻つた。王女の力で出来る限りの親切をつくした。彼女は彼れの傷口をしぼつたり、夕食を用意したり、丈夫な木の臥床を準備したりして、衷心彼れの爲に便宜を與へた。ギドーはその日の決闘の爲に身體綿の如く疲勞してぐつすりとなこんで仕舞つた。

プレビアスには七人の男子があつた。皆腕力の強い子であつた。そこでプレビアスはこの七子呼び出して次の如く話した。

「お前達に十分了解して貰ふ必要があるから話して置くが、今夜の中にこの旅人を殺害しないと、私は明日は死人の仲間入りをすることになる。私はこれ位強い男を見たことは無い」

七人の中の一人は言つた。

「では、父上、私達だけで直ぐ彼奴をかたづけして仕舞ひませう」

眞夜中頃兄弟七人が打伴れて王女の室へ入つた。其所はギドーの眠つてゐる場所であつた。その部屋の下は直ぐ海であつた。

彼等は互に言つた。

若し我々七人が一緒になつて、眠つてゐる男を殺害するならば、我々は死人と大した異りはないことだ。そこで我々は今彼れをベット其外一切の品物と總ぐるみにして海中へ投げて仕舞つてはどうだ。さうすれば彼奴は逃亡したといふ風に世間から思はれるに相違ない」

相談はこれに一決した。彼等は眠つてゐる武士を捕へて海上に流した。ギドーはこの出来事を全く知らないでい、工合に眠つてゐた。然るにその夜一人の漁夫は例の如く海上に出てゐるとベットの落ちる音を聞いた。月光にすかして見ると一人の男がベットに横はりつゝ、水上に漂つてゐた。彼れは大に驚いて叫んだ。

「これは驚いた。貴殿は誰ですか。水に呑まれない先きに助けようと思つてゐるのだから、先づその名を名乗るんだよ」



ギドーはこの大きな聲で目がさめた。彼れは上には天と星、下には大海の波濤を見た。何所に來たのであるか全く彼れには分らなかつたのである。彼れは漁夫に言った。

「親切な私の友人よ、私を助けて下さい。お禮は澤山致すつもりだから。私は決闘した旅人ですよ。しかしどうして此所へ來たのであるか私には少しも分らぬのだ」

漁夫はこの言葉を聽いてからギドーを己が船に入れて、我が家に伴れ還つた。ギドーは漁夫の家で翌朝迄眠つた。

かゝる間にプレビアスの七子は、旅人が既に死んで仕舞つたから心配は御無用でありますとその父親に話した。父親は大に満足した。彼れは最早何等の心配すべき事柄も無くなつたから、早速武装して城門に近づいて叫んで言ふには、

「今復讐するから旅人を早く出すんだよ」

國王は王女に命じてギドーを起して決闘の準備をさせようとした。王女はギドーの室に入つて見たが其所にはその人の影も見えなかつた。彼女は何人かこの大切な人物を伴れ出したのであらうと言

うて泣き叫ぶのであつた。特に彼れのベットさへも無くなつて仕舞つたといふことを聞かされて、彼女の驚きは倍々大きくなつた。或者は彼れが逃亡したのだと言ひ、他の者は彼れが殺害されたのだと言つてゐた。城門ではプレビアスの大聲で叫ぶのが聞こえてゐた……「早く出て來ぬのか。今日は彼れの首を國王の御前に持つて行くのだから……」

このやうに宮城内が上を下へと混雜してゐる間に、前記の漁夫が王の席近く進み出で、次の報告をした。

「旅人の居らなくなつたことを御心配になる必要はござりません。昨夜私が海上に出獵してをりますと、あの御仁はベットに横はつたまゝで浪の上に流されてをりました。私は直ぐ私の船に救上げて只今私の家で眠らして置きます」

國王はこの吉報を得て大に満足した。そこで王は直に命を下して決闘にとりかゝるやうにとギドーにその旨を傳へしめた。プレビアスは俄に恐怖を感じた。彼れは勝負の結果を恐れて平和を申込んだ。しかし、この願ひは僅に一時間たりとも許されなかつた。そこで兩人は再び決闘場に入つて猛烈に闘つた。ギドーは第三回目の打撃で敵手の片腕を切り落し、その後彼れの首をも斬り落した。彼れは直



にその首を携へて國王の前に出た。國王は大に満足した。王はプレビアスの七子が父親と共に邪惡の道を踏んでゐたことを知つたので、彼等を悉く磔刑に處した。ギドーは國王から多くの名譽と山なる富を授けられたが、斷乎として是等を受取らなかつた。ティリアスはギドーの取持で再び名譽を與へられこれ迄受けて來た苦しみの償ひをしてもらつた。ギドーはこれで己が責任も濟んだからといふので國王に暇を乞うた。

國王は別るゝに臨んで言うた。

「善き友よお別れする前には是非とも貴殿の名前を聞かして貰ひ度いが」

彼れは答へた。

「陛下よ、私の名前は陛下が既に幾度もお聞きになつたものでござりまする。私こそはギドーであります」

王はこれを聞いて嬉しさの餘りギドーの頸を抱きしめて、貴殿が若し我が宮城にゐてくれるならば、領地の澤山を與へてやらうと約束するのであつた。しかしギドーはこれを拒んだ。彼れは親切な

禮を國王に返した後、王の面前を辭した。

ギドーは英吉利國に向つて出帆した。そして彼れ自身の城へと急いだ。彼れは城門の近くに多くの貧乏人の集つてゐるのを見た。特に是等の貧乏人の間に彼れの妻が巡禮人の風を裝うて立つてゐるのを目撃したのである。彼女は毎日のやうに、貧乏人の一人一人に一錢づゝ、恵んでゐた。彼女は毎日夫の無事を祈つてゐた。死ぬる前には是非もう一度夫に會つてみたいと神に祈念するのであつた。

或る日のことであつた。それは恰度彼女の夫が城に戻つて來た日のことであつたが、當年七歳になつた彼れの男兒が、美服を着けて己が母親と一緒に乞食の間に坐してゐた。彼れは彼れの母親が常に施物を與へることにしてゐる一人の乞食が、いつも聞き覚えてゐるそのお祈りの言葉を、子供心にも善く記憶してゐたものと見え、この日事あらたまつて母親に次のやうに問ふのであつた。

「お母さんが是等の貧乏人からお祈りして貰ふのは私のお父さんのことなの？」

彼女は答へた。

「さうだよ。お前のお父さんのことを神様にお祈りして頂くのですよ。お前さんのお父さんは結婚してから三日目の夜私をお棄てになりました。それから後一度もお目にかゝらぬのですもの……」



夫人は是等の整列してゐる貧乏人の間を歩いてゐる間に、彼女はそれが彼女の夫であるとは固より心付かなかつたのである。ギドーは言葉を發して發覺する恐れがあつたから、わざと沈黙したまゝ、頭を下けてお禮の意を表した。母親の後には前記の七歳の男兒が従つてゐた。ギドーは目を上げて我が兒を見た。初めて見た我が兒！ 彼れは感慨無量であつた。彼れは我れと我が心を抑へることが出来なくなつて、俄に兩腕にこの兒を抱き上げて接吻した。そして言ふやう、

「嗚呼何卒神様よ、この兒の將來に御恵みを賜はらんことを」

母親はこの巡禮者の行動が餘りに感情的であるのを見て迅く其所を去るやうにと命じた。巡禮者は彼女に近寄つて來た。しかし名乗ることもなく、たゞ近くの森で、閑靜な所で住むことを許して貰ひ度いと願つたのみであつた。彼女はこれは眞實の巡禮者であると思つてゐたから、一つには神への御恩報謝の爲と、一つには彼女の夫の幸福を祈願する爲から、一つの庵をこの者に造つてやつた。彼れは長い間其所に住んでゐた。しかし、いよく末期の時になつてから、彼れは彼れの看護人と呼んでかう言つたのである。

「城内へ行つてこの指環を城主の御夫人に至急に渡して貰ひ度い。そして若し御夫人が私に會ひ度い

言はれたならば、直ぐ來て下さいと傳へてほしい」

使者は直に城内へ走つて、その指環を城主の夫人に渡した。夫人はこれを見るや否や、「おやこれは私の夫の指環ではないか」と叫んだ。そして大急で森へ來た。しかし、ギドーはこの時既に息が絶えてゐた。

彼女はその遺骸にとりついて泣いた……「嗚呼私の望はこれで絶えて仕舞つた」

彼女は嘆息して又言葉をつげた。

「私が私の夫の爲に分配した供養の品は今何所にあるのだらう。私は私の夫が彼れ自身の手で私の施物をお受けになつたのを見たのだ。そして私とその折それが私の夫であることに心づかなかつたのだ。又貴郎は……（その死骸に呼掛けていふ）……貴郎の兒を御覽になつて震へてゐられました。貴郎は彼れに接吻なさいました。しかし、私にお名乗りにならなかつたのですもの。貴郎は何を爲さいましたのです。お、ギドー様、ギドー様、私は最早や貴郎に會ふことが出来ぬのです」彼女は盛んな葬式を出して彼れの遺骸を埋葬した。そして幾日も幾日も彼れの死を悲しんだのである。



## 〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は基督、又その妻は魂、ティリアスは一般に人類、鮎はジョン聖者及び基督の降誕を豫言した他の豫言者等をそれ／＼表はしたものである。鮎の入つた山とはこの世界のことである。死んだ龍とは古い掟、又その龍の腹から出た黄金は十戒のこと、次に名劍は教權、王女は聖母マリア、プレビアスの七子は大罪、漁夫は聖靈を表はしたものである。

## 〔考證〕

人間の口から鮎が現はれて来て、それがやがて龍の腹から黄金を取出す機縁となつたり、或は名劍を見出して強敵を殺す原因となつたりする仕組みは、明かに印度又はアラビア物語式である。蓋し東洋物を種本したのであらう。

## 一七三、人生の重荷

或る國王は一人の教師とその弟子を伴れてお祭り市に出掛けた。三人は市場に立つてゐると偶然に賣物になつてゐる八つの包を目撃した。弟子は先づその最初の包について先生に質問を發していふは、

「貧乏の値打、即ち私達は神を愛したが爲に苦しみを嘗めることになりましたが、その報酬は如何なるものでありますか」

先生、「天の御國が来る」

弟子、「成程、それは高い値であります。第二の包を開けてみませう」

先生、「温順といふものがそれに入つてゐる。温順なる者は幸福を與へらる」

弟子、「成程、温順と申すものは善いもので、これほど貴い物は他にありませんまい。時に一寸お尋ね申しますがその代價は？」



先生、「金や銀では勘定が出来ぬものだ。金銭ほど下等な物は無い。私は金銀の代りに土地を要求する。土地以外の物は私は受取らぬ」

弟子、「土地なら印度と英吉利の間に人の住まぬ広い國がありますから、其所へ行けばいくらでも取ることが出来ます」

先生、「いや、いや、この土地は死人の土地である。其所に住んでゐる人々を悉く食つて仕舞ふ土地である。人々は皆其所で死ぬことになつてゐる。私は生者の土地を欲する者である」

弟子、「私は先生の今の言葉が十分その意味が分りませぬ。人間は皆死ぬるものに定つてゐるのに先生だけがその例外者にならうと思つてゐるんですか。先生は永久に生きてをり度いのですか。従順なる者は祝福さる、そはこの世界を遺産として授けらるればなりとあるでせう。次に第三の包の中には何がありますか」

先生、「餓と渴」

弟子、「これをどれだけでお買上げになりますか」

先生、「正道といふ代價を拂つてこれを買上げる。正道を求めて餓と渴を感じてゐる者は神様から祝福されるものである。彼等は臆て満たされるから」

弟子、「怠るところがなければ正義を失ふことはありません、次に第四の包に何がありますか」

先生、「涙と、號泣と、悲哀、上を濡らし、又下を濡らす……」

弟子、「涙と號泣を買上げるのは世間の人の爲さぬことではあるが、私だけはそれを買つてみるつもりです。聖者はそれを欲してゐられますから悲しむ者は祝福さる。それは慰めを得ればなりとも言はれてをりますから、時に第五の包には？」



先生、「これは大きな包を分けた物である。その内部には慈悲といふ物が入つてゐる。これは實に善い品物だ。一言にしてつくせば私は慈悲を購ふに慈悲を以てし、永劫を購ふに短かき時を以てしようと思ふ」

弟子、「若しその慈悲と申す者が先生の代りに答辯するのでなければ、先生はかういふ質問に對して頗る下手な判断者となるんでせう。しかし、僥倖にも慈悲といふ者が先生の保證人となつてくれるから好都合です。故に慈悲深き者は祝福を受く。それはかくの如き人々は慈悲を受けるからであります。この人生に於ては私達は貧と、憐れさと、難事とに満たされてをります。次に第六の包を開けて下さい。もつと良い品物が入つてゐるかも知れぬから」

先生、「この包には明かに溢れるばかり入つてゐる。しかし、私は紫の衣と同様に皆の人の眼前にこれを曝らすことを欲しない。見度ければ密かに開けて見るが、そして其所で代價を定めよう」

弟子、「それは成程妙案であります。ではその次の包は？」

先生、「純潔といふものが入つてゐる。これは非常に高價のものだ。あの金銀の瓶には信仰、善良、慈善、精神上の悦樂等が入つてゐる。又是等の衣服の中にはさまざまの貴重品が入れてゐる。それ、是所に説教、冥想、祈念、沈思默想がある。救世主は是等の品々を正しい物とお考へになつてをられます。そして黄金や寶石類よりも望ましきものとお考へになつてをられます」

弟子、「それではそれを所有すれば大きな利益がある譯だ。では、何を御希望になりますか」

先生、「神様を見度いこと」

弟子、「心の純潔な者は祝福されます。彼等は神を見ることが出来るからであります。次に第七の包をお開け下さい」



先生、「それには平安といふものが入つてゐる」

弟子、「平安ですか。平安を私に賣らうとするのですか」

先生、「私は貧乏者であるから、無代價で如何なる品物でも他人に譲り渡すことは出来ぬ。亦如何なる正義如何なる富貴を以てするもこれを他人に賣ることは出来ぬ。しかし、寛大のみが私を富貴にしてくれるものである。それは何故かといへば元來私は貧しい田舎者で汚い泥土から造られた者である。生れが賤しいといふことが常に私を苦しめてゐる。私は汝は土なり、故に汝は土に還へるべしといふその非難の言葉を最早忍耐して聞くことは出来ぬ。私は寧ろ汝は天なり、故に汝は天に還へるべしと言つて貰ひ度いのだ。私は神の子孫の運命を果たすことを熱心に希望してゐる。私は神の子たらんことを望む者である」

弟子、「私の仕事はこれで終りました。私は事實を認めてゐる。最早貴殿を疑はぬ。平安を作る仲裁者は神様から祝福されます。それはかくの如き人々は、神の子と呼ばれるが故であります。故に若し子としての愛情を失はぬならば父の遺産を與へられます。さて、最後の包には何がありますか。言つて下さい」

先生、「正しい道を守つた爲に受けた苦難と迫害があるのみです」

弟子、「ではそれに對して何を求めますか」

先生、「天の王國を」

弟子、「私はそれを貴殿に貧乏の代價として與へましたよ」

先生、「成程、さうであつた。しかし、月又月、週又週、人はその欲望の道を往復してをります。現在の週又は月が終らぬうちに残るものは何物ですか」



弟子、「私は貴殿の商賣上の御技倆の非凡なのに感心してをります。善良にして且つ忠實なる僕とは貴殿の如き人物を言ふのでせう。貴殿は二三の事柄にかけて忠實であつたのだから、私は今日からは貴殿を多くの事柄を監督する君主に任命致しませう。そして貴殿は貴殿の主の悦びに與かるがよろしいです」

〔考證〕

この作は全篇問答體をもつて一貫してゐる所に特長がある。そしてその對話の進行してゐる間にいつとはなしに師弟の位が轉倒してくるやうに思はれるのも異様である。

一七四、忘恩の報

或る皇帝は或る日の午後遊獵に出掛けた。偶々或る森林を通過すると一匹の蛇がひどく悲しい聲を出して泣いてゐた。それはこの蛇が數人の牧羊者に捕へられて固く樹木に縛められてゐたからであつ

た。皇帝は大に同情を寄せて蛇の爲にその縛めを解き、且つその體が冷たく凍えてゐたので彼れ自身の懷中に入れて暖ためてやつた。然るに蛇は元氣を復恢するや否や、その恩人であるところの皇帝の體に噛みつき、傷口から怖しい毒を注ぎ込んだ。

皇帝は蛇に問うた。

「何故そのやうな事をなしたのか。善に報ゆるに惡をもつてするとはどういふ譯か」

蛇はかのバーラムの驢の如く俄に人間の言葉を與へられて答へるには、

「自然から授けてもらつた性質は誰でもこれを無くすることは出来るものではありません。貴殿は貴殿のお力で行ふことの出来る事を私に對して行はれました。それと同様に私の天性に従つて私の行ふべき事を行つたに過ぎません。貴殿は貴殿の御自由になり得る親切の行爲を私に對してお示しになつたのです。私は又私の力でなし得るものを以て其の御恩に報いたのであります。私は貴殿に毒を進上致したのは、毒以外に私の獻上物は無いからであります。加之、私はもともと人間の敵であります。私は人間の爲に呪はれて蛇となつたものであります」



皇帝と蛇がこのやうなことを言ひ争つてゐると、其所へ一人の豫言者が來たので、彼等はこの豫言者から、何れの議論が誤つてゐるかを判断してもらふことにした。

判断者は言つた。

「兩方の話だけでは真相を判断することは困難であるから、先づ事實をもと、して判断しようと思ふ。事實にもどつて檢べる爲に先づ蛇君はもとの如くに樹木に縛しめられなくてはならぬ。そしてその後皇帝陛下は前と同様に蛇君の縛めを解くのです。そして最後に私は何れの方が正しいか判断しませう」

そこで直に蛇は樹木に縛められた。豫言者は蛇に話すには、

「さあ、もと通りに縛つたぞ、出来るならこの縛めを解いてみよ」

蛇は答へた。

「解けるものですか。このやうに固く縛ばられては動くことも出来ませんよ」

豫言者は言つた。

「では天の配劑に依つてそのまゝ、其所で往生するんだよ。お前は常に人間に對して恩知らずであつた。だから今後も永久に他人の恩を感じることはなからうと思ふ」

彼れは又皇帝に對つてかう言つた。

「陛下よ、もうお去りになつてもよろしいのですよ。陛下には何の御罪も無い譯です。胸から毒をお取りになつて下さい。だが、再びこのやうな御分別の足らぬ行ひはなさらぬやうに、固く御注意申上げます。蛇と申すものは持つて生れたその性質だけで物ごとを行ふものでありますから」

皇帝は豫言者の援助と助言に對して、大に感謝した後其所を去つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は善良なる牧師のことである。森林は現在世界、蛇とは悪魔のことである。牧羊者とは基督教の説教僧である。豫言者とは思慮の深い懺悔聽取僧のことである。



## 〔考證〕

これと相似た物語は『イソップ物語』の中にも見えてゐる。亦前記のアルフォンサスの作中にも見えてゐる。しかし、その最も著しいものは印度の古説話集『パンチャ・タントラ』(Pancha Tantra)中に載せてある物である。『パンチャ・タントラ』は古い時代から、Biddpai'の名に於て波斯譯から歐洲語に重譯されてゐたものである。蓋し本篇の作者もこの種本に負ふところが多かつたと思はれる。

## 一七五、世界の奇異

プリニーの書いてゐる書物に依るとかういふ奇異な人間が世界に住んでゐる。

頭が犬の人間がある。話す時には吠える。全身悉く動物の皮膚である。

是等の人間は説教僧のことである。その譯は説教僧たる者は他人の模範となる必要上粗服を着なく





てはならぬからである。

印度に額の上にたゞ一つだけしか目を持つてをらぬ人間が住んでゐる。彼等は動物の肉を食べて生活してゐる。

是等の人間は一心不乱に神を祈念する人々である。

アフリカに頭が無くて、胸に目を持つてゐる婦人がある。

是等の婦人は謙遜な人間に似てゐる。

極東に、然かもこの世界の樂園の直ぐ前面の所に、全然食物を食べない人間が住んでゐる。その人の口は餘りに小さいので、飲料物は皆蘆の莖を通じて胃袋へ流すのである。彼等は林檎と花の香だけで生活してゐる。彼等は悪臭に中毒すれば死ぬるのである。

是等の人々は節制主義の人々である。悪臭に中毒して死ぬるといふことは罪惡で死ぬるといふことである。



鼻を持たぬ人間がある。かういふ人々の顔は全く滑かである。彼等は見ら限りの物を悉く善い物だと思つてゐる。

この種の人々は愚人である。

鼻と下唇が餘りに長いために、眠つてゐる間に、その人の顔が全く鼻や唇で掩はれて仕舞ふ人間がある。

是等は正しき人である。

スキジアに全身を包んで仕舞ふほどの大きな耳を持つた人間がゐる。

是等の人々は神の御言葉に耳を傾ける人々である。

家畜のやうな歩きかたをする人間がある。

是等は罪深き人々である。

頭に角を生やし、短い鼻と山羊の脚を持つてゐる人間がゐる。

是等は驕慢の人々である。

イシオピアに片脛だけで、然かも最も迅速な動物をも追越す速さの人間が住んでゐる。

是等は慈悲深き人々である。

印度に一寸法師が住んでゐる。彼等は山羊の脊に乗つて鶴と戦争する。

是等は事柄の初めに當つて熱心に仕事をなし、それが出来上らぬうちに仕事を止めて仕舞ふ人々である。

印度に六つの手を持つてゐる人間が住んでゐる。彼等は衣類を着ることはない。しかし、非常に多毛であるので河の中に住んでゐる。

是等の人々は世界の中で最も労働する人々である。



各々の手に指を六本、各々の足に同じく指を六本づゝ持つてゐる人間がある。  
是等は汚されない人々である。

頭上に毛が一本もなく、髭鬚だけが胸の所まで垂れてゐる婦人がある。  
是等は有徳の人々である。

イシオピアに一人で四つの目を持つてゐる人間が住んでゐる。

是等は神を恐れる人々である。

歐羅巴に非常に美しい顔の、しかし、頭も、頸も、口も鶴の形をした人間がある。

是等は判事のことである。何故なら判事といふ職は長い嘴を用ひて、心の中で思つてゐることを口に出す前に、長い間考へてみる必要があるからだ。若し判事の凡てがかういふ者であつたならば不公平な審判が今日よりもつと少なくなるのだが。

〔考 證〕

材料は悉くプリニーあたりから來てゐる。プリニーは埃及の事柄を書いた學者である。東洋の一寸法師が鶴と闘つたといふ話は『イソップ』式の物語であるが、土耳其の昔話にも見えてゐる。『マンダザルの東洋記』の中には本章の内容に共通したものが可成り多い(予の『マンダザル東洋記全譯』參照)。蓋し兩者の種本が同一であつたらだと思ふ。マルコ・ポローの東洋記』中に出て來る東洋の不具者紹介も同様である。

一七六、香の高級花と實

或る所に一人の男兒が生れた。生れながらにしてこの兒の體は臍を中心にして上部より二分されてゐた。頭が二つ、胸が二つ、そして耳目鼻口がそれ々二人前づゝあるといふ譯であつた。生れてから二年後にこの一部分が死んだ。しかし残りの部分はそれから約三日間生きてゐた。

プリニーの記録に書いてあることであるが、印度に香氣の強い花の咲く、そして又同様に香の高級果實をむすぶ樹木があつた。ジャコルラスといふ蛇はこの樹木の棲近くにんでゐたが、この香を非常



に嫌つてゐた。そこで蛇はその根に毒を吹きこんで香の出る源を殺さうとした。園丁はこれを發見して直ぐその國の解毒劑を持つて來て、その樹木の梢の枝にそれをそゝいだ。藥の效能は忽ち現はれて根の毒を悉く驅除した。そこで今迄花も果實も無かつた樹木が今や香の高い花と實を持つやうになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、前記の不具の子供は人間の魂と肉體である。樹木は人間その者、果實は善行爲、蛇は惡魔、園丁は神、枝は聖母マリア姫である。『イザイア篇』にも「ジェセ(デヴィットの父)の根より枝生ずべし」とある。ヴァーヅルの『牧人歌』の中にもそのやうなことが歌つてある。次に枝に解毒劑を入れたといふことは基督がそれをお助けになつたといふことである。

一七七、迫害

『エスター』の第一章に書いてある事柄であるが、アスエラス王は國內の諸侯を悉く招いて一大饗宴を張つたことがあつた。王は皇后をその席に侍らしめて、その比類なき美貌を諸侯に見せつけてやうとした。王は實にこの美貌の爲に彼女を皇后の位にまで即けたのであつた。

宴會の終つた後、國王はアーマン某を拔擢して高官を授けた。そして國內の諸大名をしてこれを祝はしめた。諸侯は悉くこれを承諾してアーマンの爲に敬意を拂つた。然るに國王の叔父マルドチエアスはこれを拒んだ。國王は王權を侮辱されたことを憤り直にマルドチエアス及びその家族の全部を捕へて死刑に處すること、した。亦これと同時に國內猶太人は一名も残さず殺害すべしといふ嚴命を各地に傳達せしめた。王は直に高い拷問臺を造つて其所へマルドチエアスを縛めるやうにと決心した。然るにかゝる間にマルドチエアスの爲に僥倖ともいふべき事は、二人の反逆者が國王を殺害しようとした事件が起つたことであつた。マルドチエアスはこの機會を利用して是等の反逆者を檢舉し、その功に依りて紫衣を與へられたので、それを着て王冠を被つて王の軍馬に跨つて市中を得意になつて歩いた。アーマンは彼れの武士を悉く引卒してその配下に立ち、大に彼れの爲に祝意を表はさなくてはならぬことゝなつた。アーマンとマルドチエアスの境遇は全く顛倒して仕舞つたのである。

町内の巡視が一通り終つてから、マルドチエアスは皇后にアーマンが我等の國民の全部を殺すこと



を企てたと告げた。皇后はこれを聞くや大に悲しみ、自ら斷食して是等の不運なる國民の爲にその冥福を神に祈念した。後皇后は一大饗宴を開き國王とアーマンをもその席に招いた。席上で皇后は先づ國民の爲に生命乞ひを國王に懇請した後、嘗つてアーマンが國民を悉く殺害することを企てたことがあるとその委しき事情まで王に語り聞かせたのであつた。國王は大に怒つて嘗つて一度はマルドチエアスの爲に造つたところの、その同じ拷問臺の上に、アーマンを縛めるやうにと命じた。かくの如くにしてマルドチエアスは一切の名譽を一身に集め得た。

かくて天の配劑その宜しきを得て、罪無き國民は殺害されることを免れ、又その反對に悪人の子孫は全く殺されつくしてその後嗣を絶つに至つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は基督で、皇后は魂である。アーマンは猶太人を表はし、教會を破壊しようとする人々を代表してゐる者である。二人の反逆者とは猶太人と邪教徒を指差すものである。

一七八、用意周到

或る國王は己が一身と彼れの帝國を治めることの最善の方法を知らうと思つて、國內第一の賢者を招いてその意見を問うた。

賢者は答へた。

「陛下、畏りました。私にお任せくだされば萬事よろしく取計らつて御目にかけます」

賢者は直に壁上に皇帝が王冠を戴き、玉座に坐し、紫色の王服を着けた肖像を描いた。彼れは左手に地球儀を支へ、右手に王笏を握り、頭上に光りが燃えてゐるといふ繪であつた。そしてその左側には皇后が冠を被つて黄金の衣に纏はれてゐた。右側には宮中の顧問官一同が一卷の書物をその前に開いたまゝで、椅子に掛けてゐた。顧問官の前には馬上に跨つてゐる武装した一人の武士が、頭に兜を被り、右の手に槍を携へ、左方を楯で掩ひ、腰には劍を帯びてゐた。彼れは全身を鎧で固めてゐた。胸には握りがついてゐた。脛は鐵の脛甲すねよろひで護られてゐた。踵には拍車がついてゐた。手には鐵の籠手



があつた。彼れの馬は戦争には幾度も慣れてゐるもので、その馬具は實に美しかつた。王の下方には副官がゐた。一人は馬上の武士といふ格式で色のいろ／＼に異つた革製の帽子と上衣に身を包んで、右の手に答を伸したまゝで立つてゐた。又是等の副官の前面には数名の者がさまざまの形をして立つてゐた。例へば或者は右の手に鋤を持ち、左の手で家畜の運動を指揮してゐた。彼れの帯には鎌が下げてあつた。彼れはこれで穀物、葡萄、その外の物を切つたり刈つたりするのである。王の右側に、武士の面前に、一人の大工が描かれてゐた。この大工は一方の手には木槌を持ち、他方の手には鉋を持ち、帯には鑊を持つてゐた。又是等の人々の前に一人の男が一方の手に鋏、他方の手に太刀を持ち、帯には一冊の帳簿とインク一瓶を下げ、右耳にペンを挟んで立つてゐた。亦右の手に衡と錘をりを持ち、左の手に物尺ものさしを持つてゐる人もあつた。そしてこの男はいろ／＼の貨幣の入つてゐる財布を彼れの腰に下げてゐた。

皇后の前面には醫者と繪具師がゐた。又一人の男が右の手に一卷の書を持ち、左の手には壺と箱を持つて椅子に坐してゐた。そしてこの人物の帯には腫物と傷を探ぐる爲の醫者の機械が入れてあつた。彼れの近くに右の手を舉げて旅人を己が宿に招いてゐる男が立つてゐた。彼れはその左の手に非常に美しいパンを一つばいに入れてゐた。亦その上方には酒の溢れてゐる瓶があつた。彼れの帯には鍵が

澤山結びつけられてあつた。その左側に、丁度武人の前面に當る所に、一人の男が大きな鍵をその右の手に携へ、物尺をその左の手に握り締め、帯には銅貨の入つてゐる財布を下げてゐた。又國王の前面に頭髮をかき亂した一人の男がゐて、その右の手に僅ばかりの金銀を握り、左の手に三つの骰子さいを持つ。その帯には書面で一つばいになつてゐる箱を下げてゐた。

國王はこの繪を熱心に見てゐたが、終にこれこそ最善の教訓であると覺つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この王者は善良なる基督教信者或は寧ろ教長を表はしたものである。彼れは徳の美を現はす爲に紫色の衣を着てゐる。地球儀と笏は權力の記號である。燃えてゐる光とは威嚇である。皇后は慈悲の記號、顧問官又は判事は教長及び説教僧のこと、又彼等の前の書籍は聖書のことである。武装した武士は道徳で武装してゐる善良な基督教信者のことである。又他の武士は正義の馬に跨り、慈悲の外衣を纏ひ、信仰の帽子を被つてゐることを示したものである。答を伸してゐるといふことは正義を平等に分つことを表はしたものである。以下又如此。



## 一七九、貪食と泥酔

セサリアスは貪食と泥酔の厭ふべき悪徳なることを説いた時に、咽喉は全身體の中で最も不節制で又最も誘惑的な部分であると言つたのである。その娘は不潔、滑稽、兒戯、多辯、怠慢等である。それには五つの罪の段階がある。

第一は美味にして贅澤な食物を欲すること、

第二は物數寄に衣裳を飾ること、

第三は時と場合を考慮せざること、

第四は貪慾なること、

第五は餘りに多くを求むること、

人類の祖先アダムは貪食の爲に征服され、又それが爲にエソーは彼れの長子相續を棄て、仕舞つた。そしてこれが爲にソドムの國民は罪惡を犯し、イスライルの子達を曠野の中に沈淪させた。故に讚美歌作者たるデヴィッドの御言葉にもかうある。

「食物がなほ彼等の口中にあつた間に、既に神の御怒りは彼等の上に落ちて來た」

ソドムの罪過はその過多即ち贅澤といふところに源を發した。又ベセルに送られた神の人が獅子の爲に殺されたのは、貪慾にのみ彼れが耽つた結果であつた。

毎日贅澤な食物を食べてゐたと福音書の中に書いてあるダイヴィーズは地獄に葬られた。

料理人の王者ともいふべきナブサルダンはジェルサレムを滅した。

貪食の危険が如何に大なるものであるかを知らんが爲には、聖書の中の實例に照すことが最もよろしい。

ソロモンは曰く、



「王者達あしたが朝に食事をなす國は不幸なり」

又曰く、

「口中の勞役は魂を満すことなし」

貪慾の娘は泥酔である。蓋しこの惡徳は奢侈の源であるからである。奢侈は一切の惡疫の中で最も惡しきものである。これよりも惡しきものは果して何所にあるか。又これ以上に人を害するものは何所にあるか。又これよりも迅く人間の道徳を枯らして仕舞ふものは何所にあるか。眠つてゐた光榮は狂氣といふものに變じ、心の力は肉體の力と共に殺されて仕舞ふ。

バシリアスは言うてゐる。

「我等は腹と咽喉に事へるならば家畜である。そして畜生に似ることをのみ覺え、且つ自ら地上の事に心を配り、腹の慾にのみ従ふやうになつて仕舞ふ」

ボエシアスも亦その『冥想』の中でかう記してゐる。曰く、

「道徳を棄てる者は人間たることを止めし者なり。神性に進むことが出来ぬやうになれば、畜類となるより外に行くべき道は無し」

我等の主は福音書の中で次の如く宣うた。

「飽食と泥酔の爲に心を頑固のものとなさざるやうに警戒すべし」

飲酒と貪食の爲に害を受けなかつたならば、人間の知識はいろ／＼の善き分別心を生み出すものである。一家の父、一國の支配者が酒の爲に熱し、或は怒りの爲に燃ゆるならば、實に危険な結果となる。分別心が暗くなり、奢侈の心が萌し、淫慾の心が各種の惡徳と結びついて、謹慎謙讓の美徳を眠らして仕舞ふ。

故にキディアスは次の如く言うた。

「餘り多く飲酒すれば淫慾の心生ず」

泥酔の惡徳ほど嫌ふべきものは無い。一切の善事の財産……幸福の保證物……は悉くこれが爲に永



久に失はれるのである。ノアーが己が子供に裸體の姿を見せたのは酒に熱したからであつた。亦最も節操の堅固であつた。ロットが主の面前で悪事を犯したのも、酒の爲に眠りに陥つたからである。ヘロド・アンティパスも飽食泥酔の饗宴から免れることが出来たならば、恐らくあのジョン聖者の首を斬らなかつたこと、思ふ。バビロンの王バルサザーも若し泥酔さへしなかつたならば、彼れの一命も、亦その王位も失ふことが無かつたであらうと思はれる。然るに彼れはその夜餘りに泥酔した爲にサイラスとデーリアスの爲に殺害されて仕舞つた。故に使徒は我等に戒められた。曰く、

「酒をつゝしめ、そして、警戒を怠る勿れ」

我等は死後天國の饗宴に招かれんが爲に、この世では全く禁酒を守り、貪食を戒しめなくてはならぬ。

## 一八〇、忠節

ロンゴバードの史家ポーラスはオナルファス某、字をペーピエンと呼べる武士の忠節をその著書の中に書いてゐる。オナルファスはポルタティカス王に事へて大に忠勤をつくし、終にその君主を救はんが爲に自ら死地に入つたといふことである。

ベネヴェンタムの國王グリムモルダスはロンゴバードの國王ゴートバートの陣營を占領したことがあつた。(グリムモルダスは其後ラヴェンナの大名ジエリバルダスの爲に奸計に陥つて殺害された。ジエリバルダスは王位篡奪の最初の人であつた)。その時ゴドールバート王の弟ポルタテカスはハンガリアに逃げたが、その後武士オナルファスの奔走でグリムモルダスと和睦を結んで、心配無しにハンガリアを去つて再び我が本國に戻り、グリムモルダスの膝下に許を求めることが出来た。ポルタティカスは己が當然受くべき眞の權力をなほ取戻すことは出来なかつたが、しかし生命だけは無事であることが出来た。然るにこの和睦の條約が結ばれてから僅に數日にして、或る奸物がグリムモルダス王を誘惑してポルタティカスを殺すやうに勧めた。グリムモルダスは彼れを首尾よく殺害する爲に、又安全に逃亡することの無いやうにといふ用意周到の考へから、寧ろ彼れを酒に酔はして殺さうと企てたのである。

オナルファスはこの陰謀を聞き知つたので、直に彼れの扈從を引連れてポルタティカスの邸を訪つて、委しくその事情を告げた後、彼れが今引連れて來たばかりのその扈從を王のベットに入れて夜具



をその上にかぶせ、又ボルタティカスには扈從の服装をさせてこゝから逃げ出させたのである。彼れは逃げ出る時に番人の目をこま化すに都合の良いやうにと思つて、わざとボルタティカス王を我が實の從僕であるかの如く罵つたりしたのである。

このやうにして彼等はボルタティカス邸前の夜警の者の目をくゞつて、町の城壁上に造つてあるところの武士の家に到着した。彼れは城壁から綱を下げてボルタティカス王を城外へ逃がした。王は牧場へ逃げた。そして其所で乗馬を取つてこれに跨り先づアステンシ町へ走つた。そして其所から更に馬を驅つてフランス國王の許に免れた。

翌朝オナルフアスとその扈從はグリムモルダス王の面前に引出されて、彼等の主君を逃がした事の真相を訊ねられた。兩人は事實をそのままに語つた。グリムモルダスは己が宮中顧問官等に向つて各々の意見を問うた。

王はかう訊ねたのである。

「我が希望に背いてかくの如き大膽な事を行つた者に、どんな罰を加へたらよからうか」

これは重罪に處すべきものでありますと皆は答へた。

或る者はこの兩人を生きながら皮を剥いて殺すがよからうと言つた。

或る者はこの兩人は當に磔刑に處すべきであると論じた。

王は答へた。

「私をお造りになつた上帝の御名にかけて言ふが、私の考へではこの兩人は彼等の忠節を一貫したのであるから死刑に處せらるべき者では無いと思ふ。否、寧ろ彼等は名譽を與へらるべきものであると思ふ」

グリムモルダスはこの判断に従つて兩人の者に大に恩賞を施した。

グリムモルダスはこのやうに正しい事を行つたが、不幸にも彼れはその味方の一人にジュリバルダスの如き悪人を持つてゐるたが爲に、その者の爲に終に欺かれて一命を失ひ、且つその王國をすら奪はれたのである。但しゴドーバートの扈從はその後首尾善くジュリバルダスを殺して、こゝに天の配劑の正しきことを明かにしてくれたが……

この事柄は洗禮者ジョン聖者の崇嚴な御祭典の日に起つたのである。



## 〔解説〕

可憐なる者よ、武士オナルファスとは善良なる基督教信者のことである。又ポルタティカスは人間の魂を指差したものである。グリムモルダスは基督を表はし、ハンガリーは現世界をしたものである。牧場から取られた馬は殉教者と聖僧等の功勳のことである。アステンシスは『黙示録』中の都市である。フランス國は天國のことである。

## 一八一、姦淫の罪

或る國王は牡獅子、牝獅子、豹、各々一頭づゝを飼つてゐて非常にこれを愛してゐた。然るに牝獅子は牡獅子の居らなかつた間に豹と馴れあつて終に貞節を破つた。彼女はその罪の發覺を防がんが爲に王城の近くに在つた泉で、その汚れた體を洗ふことにしてゐた。

國王は事の次第を委しく目撃したので、彼れの臣下に命じてその泉を塞いで仕舞つた。牝獅子はこれが爲に彼女の體を清淨にすることが出来なくなつた。

牡獅子は戻つて來た。彼れは彼れの留守中に起つた事柄を知つた。そして己が受けた損害を明かにした後、自ら判事の資格をもつて牝獅子を死刑に處する旨を宣告し、直にそれを實行した。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この王は上帝のことである。牡獅子は基督、牝獅子は魂、豹は惡魔、泉は懺悔である。懺悔の泉が閉ぢられて仕舞へば死は直に來るものである。

## 補遺 物語四種

723  
 拉典文のものにて百八十三種の物語を有するものは、この種の拉典文の物語集の中で最も長きものである。拉典文に無くして古代のドイツ文の譯本にあるものは以上の外に三十種、又拉典物に無くして英文物にあるもの十七種ほどある。今そのドイツ物三十種の中から特に東洋物と想像され得るもの



の代表的の物語二種、同じく英吉利物二種だけを選んで、その梗概だけを左に録す。番號はドイツ文及英吉利文の原書の物語番號である。

〔廿一〕ローマ皇帝オクタヴィアナスは權力もあり金力もあつたが、黄金慾は餘りに強かつた。當時ローマに有名な工匠があつた。人民から依頼を受けて、何人も居ながらにして敵を知ることの出来る不思議の塔を造つた。そしてその樓上に奇蹟的な像を立てたのである。工匠の名はヴァージリアスといふ者であつた。彼れは市民の中の貧民を救はんが爲に火と水とを興へる細工を考へた。貧者はこの塔の側に來てその火に依りて暖をとることが出来た。彼れは又一つの像を造り、その像の額に「我を害する者は復讐さる」といふ銘を刻んだ。一人の男これを見てこの像の内部に寶物が入れてあるに相違なしと考へたので密かにこれを破つたところが、内部から非常な勢ひで水が流れ出て來て前記の火を消して仕舞つた。しかし寶物らしい物が一つも其所に入れてなかつた。貧者はこれより大に不便を感じた。

この事ありて後、三人の王者來りローマを包圍しようとした。しかし彼等はローマ市に前記の不思議な像と不思議な塔の立つてゐる間は、到底ローマ市を滅すことが出来ぬと考へてゐた。この時三人

の武士があつて、若し我等に大きなお禮をしてくれるならばこの像と塔を破壊して來ると申し出した。三人の王は然らばそのお禮として黄金の満ちた桶を四箇興へると約した。三人の武士はこの約束の條件で満足した。彼等は直にローマ市の入口に在る三つの門の下を掘つて、その下に黄金を埋めた。即ち第一門の下には最も多く、第二門の下には稍少く、第三の下には最も少く埋めたのである。そして彼等は皇帝に謁を求めて我等は夢を占ふ者であると告げ、特に黄金の埋めてある場所を見出すことが得意であると話した。王は大に満足し三人に代るく夢を占はせることにした。翌朝三人の中の年長者が王の前に出て、昨夜私は王城の最も遠き門の下に澤山の黄金が埋めてあるのを夢で知りましたと告げた。王は直に従者と共に其所を掘らしてみると果して澤山の黄金が出た。翌朝第二の武士は第二門の下に黄金が埋めてあることを知つた。又第三日目には第三の武士が、第三門の下に黄金の横はつてゐることを豫言した。そして最後にこの三人の武士は、塔の下に非常に貴重な寶物が埋めてあることを異口同音に皇帝に話した。皇帝は黄金慾に驅られて直にその塔の下を掘らせた。然るにこの三人の武士はその夜塔の下に大きな穴を掘り火を放つて走つた。翌日塔は火事に焼けて倒れて仕舞つた。市民は皇帝の慾心深きを憤り、その口中に溶かした黄金をそ、ぎこんでに皇帝を害した。



## 〔考證〕

この物語は『七賢物語』にその範を學んだもので、所謂ダイオクレシアン皇帝に関する物語材料を巧みに流用したものである。

〔廿二〕邪教國の君主某はピーター聖者とポール聖者の遺骸をローマから奪はうと計つた。この王一日天下に美姫を求めた。その臣某、王に多くの黄金を要求して自分の妻を王に侍べらせた。翌朝王はこの真相を知つて大に憤り、終にその臣を國外に放逐した。しかし王はその妻の心を賞して厚く遇した。この後王はローマを包圍すること猛烈を極めた。ローマ市民はその厭迫に苦しんだ結果、前記二聖の遺骸を敵に與ふべきや否やをローマの七賢に問うた。七賢の中の第七番目の聖者は答へて曰く、「かゝることは打棄て、置いてよし、明朝敵軍は自ら饋めべし」と。翌朝塔の上に靈驗現はれ敵は軍自ら饋走した。ローマ市民は二聖の神力に依るものであるというて、これより倍々信仰心が強くなつた。

## 〔考證〕

これは『ローマ城縁起物語』から材料をとつたものではあるが、しかし、前記の『ローマ七賢物語』にも關係ある

ものであつて、ダイオクレシアン皇帝を中心にして發達して來た物語とも見られる。この皇帝の物語は東洋的色彩に富んでゐることは何人も認めてゐる事實である。

〔6〕ローマにて夜間殺人犯を取締る爲に一つの法令が發布され、且つこれが爲に見張りの役人をさへ新たに設けることになつた。

偶々ローマ市中に一人の年若き美人があつて、その女が一人の老年の武士と結婚した。然るに宮中に事へてゐる三人の若者が恰も申合せでもしたやうに何れもこの美人に懸想したのである。女はこれを善い事のやうに考へてこの三人の若者からそれ／＼相當の金錢をしほり取つてゐた。但し彼女はこの事實を悉く彼女の夫に告げてその指揮を受けてゐたのである。暫くしてからこの夫婦の者は三人の若者を殺害することを企てた。妻の兄弟の一人は前記の殺人犯取締の役人であつた。そこで彼女は夫の殺した上記の三人の若者の死體を處分する方法としてこの監督役人を利用することを考へた。彼女は彼れに告げて言ふには、私の夫は他人と喧嘩をした爲に終に相手の男を殺すやうになつた。故にその死骸を何とか穩便に處分して下さいと、かう願つたのである。そして彼女は澤山の金をさへ己が兄弟に與へた上／＼懇願するところがあつた。彼れは私情に動かされて終にその死骸を湖水の底に



沈めた。然るに彼女は第二の若者の死骸を處分する必要上、彼女の兄弟を欺いて今湖水の中に棄てた死骸が再び戻つて来たから、今度は再び戻つて来ぬ爲に首に石を結んで棄て、下さいと言つたのである。そこで彼女の兄弟はこの言葉を悉く信じて、第二の若者の死體を第一の者と同一のものだと思つてその頸に石を結んで海中にこれを棄てた。然るに彼れが死骸を棄て、還へるのを見て直に彼女は叫んで言ふには、今の男は又戻つて来たから今度は焼き殺して下さいと頼んだ。彼女の兄弟はこの言葉を信じて第三の若者の死骸を森林に持つていつてこれに火を放つた。そして一旦我が家に戻つた。彼れが再びその森林に戻つてみると一人の武士がその火の側で暖をとつてゐた。彼れはこの武士を見て又々火の中から逃げ出したものであると誤解したので、馬も財寶も皆一つにして彼れと一緒に火中に投じた。そして三人の若者は皆殺されて仕舞つたので、彼れは女王に多額の報酬を要求して、悉くこれを與へられた。

しかるにこの陰謀は終にあばかれた。且つこの夫婦は互に争ひを生じた爲に舊惡が悉く明かになつて来て、悪人としての罰を當然受けなくてはならぬやうになつた。

## 〔考 證〕

これも亦『七賢物語』から想を暗示されたものである。

〔15〕二人の王が互に王位を争つた。結局競馬にてその何れが適任者であるかを決定しようといふことに相談がまとまつた。一人の王子の臣に非常に賢い者があつた。彼れは競馬の折に種馬を利用することその王子に勧めた。この考へが頗るよかつた。即ち牝馬の後に盛りのついでる種馬を走らせただけ首尾よく勝負に勝つことが出来た。その結果この王子は王位に即くことになつた。

## 〔考 證〕

この物語も亦アラビア傳來の『七賢物語』に負ふところが多かつたのである。

(終り)

昭和二年猛夏八月譯了す。

東京市小石川寓居にて

譯者 金子健二誌す



著書目録

- 「ジョーサー」「カンタベリ物語」全譯
- 「英語基礎學」
- 「マンダギル東洋旅行記」全譯
- 「英國世相史」
- 「言葉の研究と言葉の教授」
- 「カンタベリ物語」全譯改版、合二卷
- 「馬のくしやみ」
- 「小泉八雲全集」(合名譯)
- 「言語哲學と言語共和國」
- 「北歐の海賊と古代英吉利文明」
- 「ジエスタ・ローマノラム」全譯

- 東亞堂
- 興文社
- 大鐙閣
- 寶文館
- 寶文館
- 國際文獻會
- 積善館
- 第一書房
- 目黒書店
- 研究社
- 寶文館

ジエスタ・ローマノラム 終

「ジエスタ・ローマノラム」(中世西洋今昔物語)

複製不許



定價金四圓五拾錢

昭和三年一月廿五日 印刷  
昭和三年二月一日 發行

著作者 金子健二

發行者 大葉久吉  
東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地

印刷者 竹内喜太郎  
東京市牛込區榎町七番地

發行所 株式會社 寶文館  
東京市日本橋區銀町三丁目  
大阪市西區阿波堀通四丁目

日清印刷株式會社



株式會社 寶文館發行

板垣守正著 戲曲集 自由黨異變	石井香夢著 名劇 物語	水田明著 西歐名作 物語	赤城しづか著 赤支那	蘆谷蘆村著 カトトリック 童話集	ヨゼフ・フリービー編 戸塚文卿譯 カトリック 思想史	東京家政學院教授熊野寅吉著 改訂 男子の製圖より裁縫まで	東京家政學院教授三上勇著 子供服洋裁 自習書	南部修太郎著 過ぎ行く日
全洋一冊裝	第洋二編編裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝
送料價金一圓八十錢	送料價各金一圓二十錢	送料價金四一錢圓	送料價金一圓二十錢	送料價金二圓八十錢	送料價金二圓八十錢	送料價金二圓五十錢	送料價金三圓五十錢	送料價金一圓二十錢

株式會社 寶文館發行

佛國宣教師 日本人 鮮血遺書	カスパード原著・深山衛夫譯 アッシュの 聖フランシスコの生涯	函館師範學校長 橋本文壽著 神道の現代的研究	文學博士 宇野哲人著 儒學史	文學士 岩橋遵成著 日本儒教概說	龜谷聖馨著 華嚴聖典研究	井上秀天著 禪の現代的批判	井上秀天著 無門關の新研究	井上秀天著 無門關の新研究
全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	上洋卷一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	上洋中各一冊裝	下洋卷一冊裝
送料價金二圓九十錢	送料價金三圓二十錢	送料價金四圓五十錢	送料價金五圓八十錢	送料價金十三二錢圓	送料價金五圓六十錢	送料價金三圓八十錢	送料價各金四圓五十錢	送料價金三圓五十錢



株式會社 寶文館發行

東京帝國大學史料編纂官 中村勝麻呂著 史學研究錄	新瀉高等學校教授 鳥山喜一著 東洋史觀	文學士 青木武助著 改訂 日本大歷史	臺中商業學校長 山崎繁樹同教諭 野上矯介共著 臺灣史	文學士 島田增平著 詳解 東洋歷史年表	文學士 島田增平著 詳解 日本歷史年表	廣島高師教授文學博士 清原貞雄著 日本國民思想史	明治中學教諭 西田卯八著 世界經濟地理講話	明治中學教諭 西田卯八著 考參 世界地理講義
第一冊裝	全洋一冊裝	全洋二冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝
送定價 金二十圓三十錢	送定價 金四圓八十錢	送定價 各金十圓五十錢	送定價 金六圓五十錢	送定價 金一圓二十錢	送定價 金一圓二十錢	送定價 金五圓五十錢	送定價 金五圓八十錢	送定價 金五圓八十錢

株式會社 寶文館發行

明治中學教諭 西田卯八著 考參 日本地理講義	廣島高師附屬小學校地理研究部編 現代地理の主眼 帝國産業大資料	理學士 石原初太郎著 自然地理學概論	陸軍教授 山川鐵三郎著 河の自然現象	山梨縣廳編 富士山の自然界	石川縣女子師範主事 川岸音二著 地理教授辭典	矢田挿雲著 太閤記	彌島清友著 婦人に榮光あれ	法學士 和田德太郎著 婚姻と離婚
全洋一冊裝	上下二冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝	第第一編編裝	全洋一冊裝	全洋一冊裝
送定價 金五圓八十錢	送定價 各金十七圓八錢	送定價 金五圓五十錢	送定價 金三圓二十錢	送定價 金一圓五十錢	送定價 金二圓五十錢	送定價 各金十二圓三十錢	送定價 金二圓五十錢	送定價 金一圓八十錢

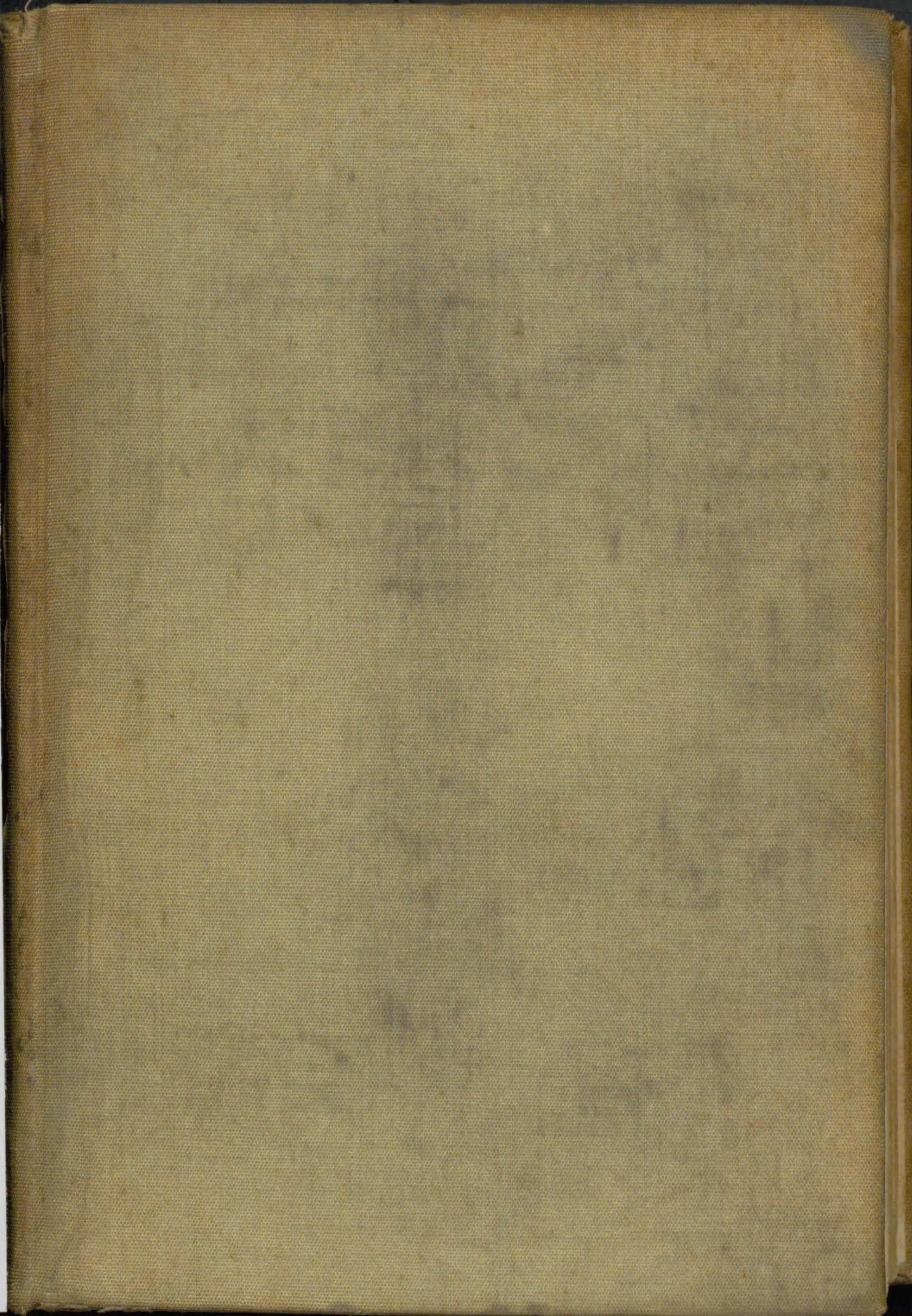
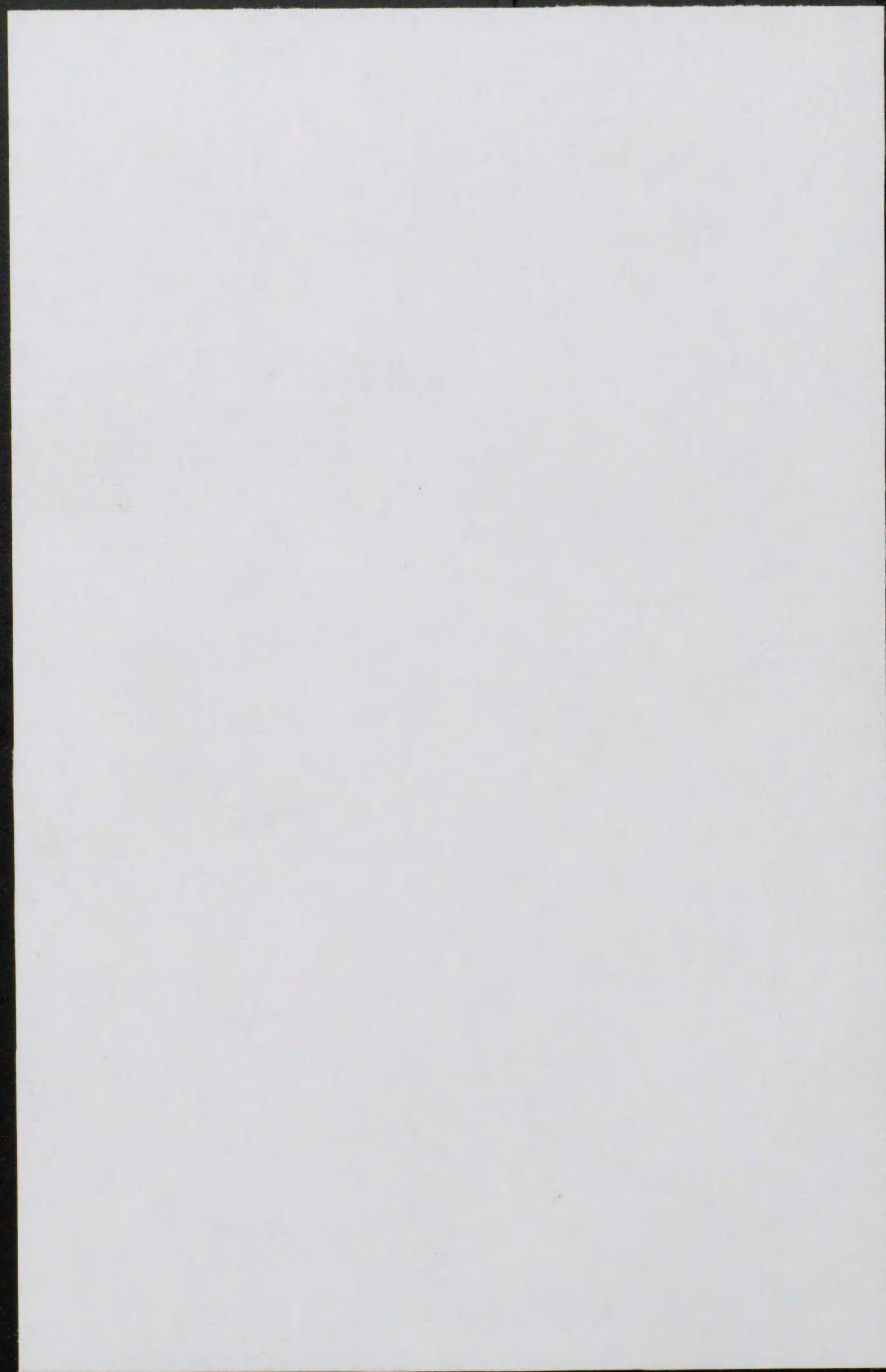












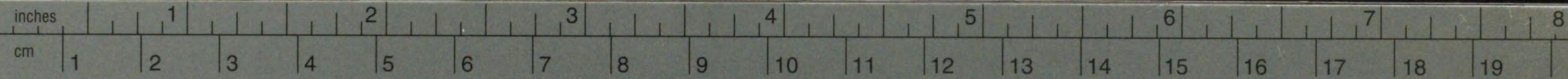
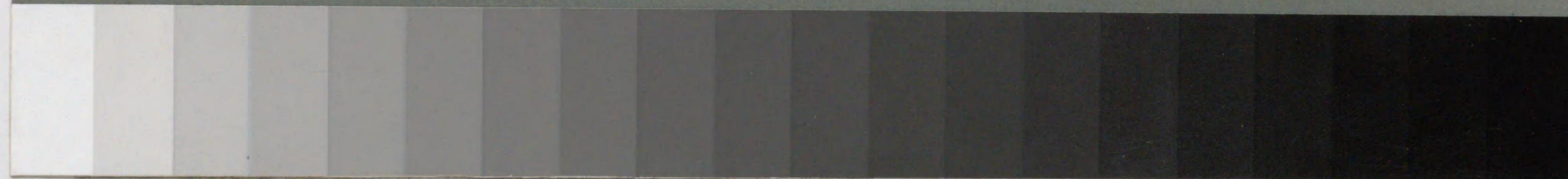


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

